# 日本書紀傳 卅一ノ巻九

和書
一〇五二二號

百三十一

内閣文庫
番號 和 10522
冊數 156 (140)
函號 特 85 1

内一二六八三號

国立公文書館
National Archives of Japan

教部省文庫印
内閣文庫
宮内省図書寮文庫
帝国図書館蔵

ふてハ在れども云へどゝゝゝ云足ハぬ心ちの為ろ
ゲ故ヨ幸ふ此ヨ古事記を以取交へて注さずてハ得
有ぬ所ゐを以て少ゥ云ろのミ

フクハシラノカミ コ、ニ クダリツカシテ イヅモノクニノ イダ

二神於是降到出雲國五十田
サヲ バマニ スナハチヌキテ トツカツルキヲサカシマニツキタテ

狹之小汀則拔十握劒倒植於
ツチニ ウチアグミ并リノ テ トヒ オホ ナ ムデノカミニ タマハク

地踞其鋒端而問大巳貴神曰
タカミムスビノミコトヨリ アマクダシテスメミマノミコトヲ キミトマサシムベト

高皇産靈尊欲降皇孫君臨此
ヲ



内一三六八三號

地故先遣我二神駈除平定汝
意何如當須避不時大已貴神
對曰當問我子然後將報是時
其子事代主神遊行在於出雲
國三穂三穂此之碕以釣魚為
云美保

樂或曰遊鳥為樂故以熊野諸手船亦名
天鳶船載使者稲背脛遣之而致
高皇産靈尊勅於事代主神且
問將報之辭時事代主神謂使
者曰今天神有此借問之勅我

チミコトヨロシクベクハマツリヨフサリ。アレモズトエテ（カラタダ）ニコニ

父宜當奉避吾亦不可違因於

ワタナカノツクリテヤヘアラフシカキヲ

海中造八重蒼柴籬柴此云蹈

フナノヘヲニ

府璽。

船枻枻船枻此云

カヘリテカヘリコトマラシキ。

浮邪能倍。而避之使者既

還報命

経津主神武甕槌神二神を将軍とし稲背脛命亦名天

夷鳥命亦名天鳥船神を案内者として天降し遣して

大巳貴神に國避の御事を問聞えさせ給ふ此件は就

て昔より其神をも荒振神に列ねて説成すが故に此

も三神の天降らせ御在し坐けら事実ふ於ても甚貴

徹ざる事共多く交ぢりけり抑大巳貴神と申すは上

八十九丁

四百三丁に注し奉ちが如く天皇祖神の御命を以て国土

を経営らせ給ひ御父素戔嗚大神の御事依を奉りて

大國主神と成らせ御在し坐し其后神と申せば彼御

誓の時に生坐りし三女神にて渡らせ給へれば天照

大神の御女とも申奉ら可き程の御事に渡らせ給ひ

然のみならず上章第五一書に素戔嗚尊曰韓郷之島

是有金銀若使吾児所御之國不有浮宝者未是佳也と
詔給へり一吾児と申すハ天神御子まして天忍穂耳尊
をゝむ情奉らせ給へりけゝ又瑞珠盟約章第(五)一ノ一
書ニ謂ゆゝ日神の御言ニ汝三神宜降居道中奉助天
孫為天孫所祭也と詔給へゝ天孫ハ即右の天神御子
まて渡らせ給へしハ其事を大巳貴神の争でゝハ所
知看ず御在し坐む斯しハ皇祖天神の詔命ニ依て天
神御子の所知食させ給ニ可き大御食国を掠奪ひ奉
らせ給ふゝどゝ申す如き悪(ク)き御心共の御在し坐
ざりけむ事此始ニ遣はされし天穂日命(御父子二神も

本ゝゝ諸神ふ傑れゝゝる神まて御在し坐すニ終ニ復
奏申さで止めゝゝ物の如く思ゝ仆奉ゝ計り此國ニ長
居し給ひて其御許ニ媚附て御在し坐と云ハ巳ニ其
時より國避の御較略ハ巳ニ相議り置せ給へゝるあり
けり偖其天穂日命(御父子の復奏させ給へゝ趣ニ従ひ
て経津主神武甕槌神を天降させ御在し坐けゝ由ハ
上四百三十三丁ニ巳ニ注せゝるゝ如し實ニハ其二神を遣さ
ゝと云も大巳貴神より始終の治まりの為ニ請申さ
れしとも云程の御事まて此國避の事共を其御子事
代主神ニ問せ給ふゝども御自ハ為させ給ハず直ニ

天神の御使を以て令問て其報命の言をも天神の御使より聞せ給ひて已命の御心をも定させ御在し坐けるに此ヨ於て大已貴神の御上より天神ヨ對奉りて少うも拒ミ防ぎせ給ふ御心の御在し坐ざりし御事を見奉り知べきふり然る時ハ天夷鳥命一神を降されても其事の調ミ可きヨ皇祖天神より殊更ニ右の二神を天降し給ハるハ何の故ぞと云ヨ古事記ヨ見えたる如く其子建御名方神の如きハ其威武を恃ミて従奉らず已ヨ大已貴神の子神すら斯る有り況や殘賊强暴横悪之神の頻ヨ多在りけるせるけれバ其を悉くヨ駆除平定るハ非ずしてハ現人神の所知食す可き天下とハ成べうもなきが故ふりくし然るハ大已貴神の天下を主領せ御在し坐す頃間ヨハ磐根木立草の破葉ヨ至る迄も言語したりけるごとく其を馭給ふハ神なりし又其世の人ハ悉くヨ神なりけれバ然のミ害ヨハ成まじけれども人世と成てハ君民共ヨ人なりけれバ然る故ニ其害ヨハ堪まじかりける事共ハりけれハ然る故ニしき者をバ幽ヨ属けて顕ヨハ令出給ハざる神策を行ハせ給ふ為なり然れバ此二神ハしも幽と顕との境を定め立させ給へる故のミと見奉るも强事ヨハ非るなり偖此國避の事件ヨ就て其次第を分て心得べき事共凡て十二條有けり一ヨハ星神香ニ背男の事なり此下なる細書ヨ一云二神逐誅邪神及草木石類皆已平了其所不服者唯星神香ニ背男耳故加遣倭

文神建葉槌命者則服故二神登天也と有て此（八大己貴大国主）
神の百不足之八十隈（隈）を隠らゝ御在ゝ坐る後の事と
為るを第二ノ一書の趣ハ然らず天神遣経津主神武甕
槌神使平定葦原中國時二神曰天有悪神名曰天津甕
星亦名天香と背男請先誅此神然後下撥葦原中國と
有て前後を大ゝに違有り先此事を定む可ゝ然る
ハ此を二神の天降り坐す中天を星神香と背男と云
有て天神の御趣けを順奉らぎりゝ其言向をハ
倭文神建葉槌命を託て言向しめて二神ハ其を係列
ハせ給ふ事無くゝて直を出雲國へ天降らせ給へる

が故を建葉槌命ハ大己貴神と神問せる御政を八頭
らゝせ給ハざりゝ（其事ハ下ハ三項を云べし）若て倭文神ハ後取神と申
す事を以て事を先を前むを先鋒と云ひ後れて行くを
後殿と云る是ゝ是亦二神の天夷鳥命を案内とし
て天降り来坐るのゝ（ふ）ずゝ先陣後陣各隊（ゝ）伍を成し
て天降らせ御在ゝ坐ける趣を知る證ゝ有る事ゝ且國
土を邪神姦鬼の多在るを中天を也然る妖星の在
て此を應（應）へけるゝ其邪神及草木石類を誅ふを
ハ必先星神をこゝろハ令平給ひけるゝ（然れが此傳ハ第二ノ一書を此
を取て心得べゝ但其を二神の言向させ給へる由
ふるハ事の脱て傳ハるぬを有べき其を此下を

倭文神建葉槌神と（大巳貴神と神問の事なり）
有ゝむ実ゝ亘一き第二ゝ此ゝ二神於是降到出雲
國五十田狹之小汀則拔十握劔倒植於地踞其鋒端而
問大巳貴神曰高皇産靈尊欲降皇孫君臨此地故先遣
我二神駈除平定汝意何如當須（歟）不時大巳貴神對曰當
問我子然後將報之有ゝ此事第一ノ一書ゝハ故天照太
神復遣武甕槌神及経津主神先行駈除時二神降到出
雲便問大巳貴神曰汝將此國奉天神耶以不對曰吾兒
事代主神射鳥遨遊在三津之碕今當問以報之之有ゥ
古事記ゝ是以此二神降到出雲國伊那佐之小濱而
拔十掬劔逆刺立於浪穂跌坐其劔前問其大國主神言

天照太御神高木神之命以問（問）使之汝之宰志波祁流韋
原中國者我御子之所知國言依賜故汝心奈何尓答白
之僕者不得白我子ハ重事代主神是可白云ゝと有て
傳ゝ小少ゝの異同ハ有れども此の御答の實ゝ如此
く御在ー坐べき御事ありけれ然ゝ此第二ノ一書ゝ
ハ既而二神降到出雲五十田狹之小汀而問大巳貴神
曰汝將以此國奉天神耶以不對曰汝二神非是吾處来
者故不須許也於是経津主神則報告時云ゝと有て上
件の傳共とハ異ゝり若如此くゝ云ゝむゝハ事代主神
ゝどゝ問せ給ふ迄も非ず大巳貴神と二神との問答

ふて然定れる上ハ餘神ゑ沙汰ー給ふ可くも非ら事
あら者をや然ら時ハ何れゑて事の違ハ有けらと云
ゑ右の疑二神非是吾處來者故不須許と云ハ凡ての
事ゑ天神の詔命を畏より奉らせ給ゑ此大已貴神の
平生の御言の狀ゑ合ざれバ疑ふくハ此より後ふ
在べき事の此ゑハ入混ひかり可き事次第條ゑ至
りて說べきゑらハ又此ゑ事代主神ゑ申さしめ給ふ事
又ハ佗の傳こゑ其事の委しりけれバ文を省くと
て右の御對の此ゑ一ゑ成れるら何れゑしても此ゑ
と云事ゑ落著心ちす第三ふハ事代主神ゑ神
問ー給ふ事の消息ふり此傳ふてハ是時其子事代主

神遊行在於出雲國三穗之碕以釣魚為樂或曰鳥遊為樂故以
熊野諸手船亦名天鳩船載使者稻背脛遣之而致高皇產靈
尊勅於事代主神且問將報之辭時事代主神謂使者曰
今天神有此借問之勅我父宜當奉避吾亦不可違因於
海中造八重蒼柴籬蹈船枻而避之使者既還報命之有
ら此稻背脛命ハ上ゑ謂ゆら大背飯三熊之大人の事
ゑらを古事記ふハ天鳥(夷鳥)命(船)神と云たら即天夷鳥
命の御事ゑら由上百十一ゑ注さらが如ー若て第一ノ一
書ふハ乃遣使人訪焉對曰天神所求何不奉歟故大已
貴神以其子之辭報平二神と有て甚く事略たら傳ふ

り古事記ハ右ハ引き續きハ僕者不得白我子八重
事代主神是可白然為鳥遊取魚而往御大之前未還来
故尓遣天鳥船神徴来八重事代主神而問賜之時語其
父大神言恐之此國者立奉天神之御子即蹈頭其船而
天逆手矣於青柴垣打成而隠也と見えたり此ハていい
事代主神を大國主神の御許ハ徴来て問ハせ給へち
趣ふり然るハ五十田狭之小汀ハての事ふり然れど
も其ハ此正書の傳の方然る可くぞ所思えたりける
三津之磯と有ハ信し難し其ハ出雲風土記ハ仁多郡
御津郷と云見えたり其を云ヶ然れども其ハ中深き
地にて船を泛べ難ふ所ハ第四ハ建御名方神の事ハ

神子由有る地
ハ在れども正書
ハ三穂と有る方
正しきなり傳
廿二巻九十八丁ハ
委しく注す可し

り此ハ御紀ハ紀ハ凡て傳ゝ〻ぬ事ふるを古事記ハの
ふぞ委しく傳りけりける今此ハ補ひて見ざる時ハ
凡ての條理通ゝ難ふり其文ハ云く故尓問其大國主
神令汝子事代主神如此白訖亦有可白子乎於是亦白
云亦我子有建御名方神除此者無也如此白之間其建
御名方神千引石擎手末而来言誰来我國而忍ゝ如此
物言然欲為力竟故我先欲取其御手故令取其御手故
令取其御手者即取成立氷亦取成剱刃故尓懼而退居
尓欲取其建御名方神之手乞歸而取者如取若葦摭批
而投離者即逃去故追往而追到科野國之州羽海将殺

時建御名方神白恐莫殺我除此地者不行他處亦不違
我父大國主神之命不違八重事代主神之言此葦原中
國者隨天神御子之命獻と有る是ふり此ゝ據る時ハ
事代主神ハ已ゝ語其父大神言恐之此國者立奉天神
之御子と有て其父大神ゝ國避の御事を申し進め給
へるが如くあれども本より其御心ゝて御在し坐ら
故ゝ御子等ゝも大義を誤らせ給ふ(常ふ)ゆゑ宜ひ掟さ
せ給へりけむうゝ不違我父大國主神之命とハ申さ
れるふり然れば此より以前ゝ僕者不得白と有ハ
拒ませ給へる状あれども然ふ非ず已命の御心ハ始

すりして此國土ハ天神御子ゝ奉らせ給ふ為ゝ經營
らせ御在し坐けるふるを然計ふも勞らせ御在し坐
て大化の功績(績)を天下ふ建させ御在し坐を容易く避
奉らせ給ハむハ容易うらざる御事ふるぶ故ふ先事
代主神ゝ問しめ次ハ建御名方神ふも快く國を避し
め給へらむ為ゝ此ゝて天より降来坐る二神ふ万ハ
打任せ給へるふり此傳無くハ大國主神の御心を知
奉る可き由無きを然るゆても甚く尊き御事ふりり
し此事天神本紀ゝ出たるハ全く古事記より抄出た
るふれども甚愛たし少る字ゝ異同ハ有を右の全
文の傳を加へすしてハ足ハざる故ゝ茅五ふハ大已貴
ゝ下五百五十四丁ゝ注してむとす

神の報告の御言あり此より其事代主神の事畢れり
小續て故大巳貴神則以其子之辭白於二神曰我怙之
子既避去矣故吾亦當避云〻と見えたり所謂當りて
古事記に故更且還來問其大國主神汝子等事代主神
建御名方神二神者隨天神御子之命勿違白訖故汝心
奈何尓答白之僕子等二神隨白僕之不違此葦原中國
者隨命既献也唯僕住所者如天神御子之天津日継所
知之登陀流天之御巣而於底津石根宮柱布斗斯理於
高天原氷木多迦斯理而治賜者僕者於百不足八十坰
手隱而侍亦僕子等百八十神者即八重事代主神為神

之御尾前而仕奉者違神者非也と所見たり此御事御
在一坐て直に隱れさせ給へるが如くあれども然り
ず右に僕者於百不足八十坰手隱而侍と申給へるか
此第二の一書に見えたる此坎の報告ふ於是大巳貴神
報曰天神勅教慇懃如此敢不從命乎吾所治顯露事者
皇孫當治吾將退治幽事と有る幽事を治させ給ふ可
き由を申させ給へるありけり即出雲神賀詞に天穂
日命の巳命児天夷鳥命に布都怒志命乎副天降遣
天荒夫曽神等乎撥平氣國作之大神乎媚鎮天大八島國
現事顕事令事避支と有る如く天穂日命より受継て

天夷鳥命の大巳貴神を媚鎮め奉りて今迄其大神の
現人神として所治りし現事顕事を事避しめ奉ると云
ハ謂ゆる神事幽事を所知看せ奉ると謂まして其御契約
此ゆ成れりしかハ二神此ゆ於て一度天上ゆ報命し
給へるありけり右の一書ゆ於是経津主神則還昇報
告時高皇産霊尊乃還遣二神曰今者聞汝所言深有其
理故更條々而勅之と見えたり是なり同じ事なれども第一の一書ゆ故
大巳貴神以其子之辭報乎二神二神乃昇天復命而告
之曰葦原中國皆已平竟と有ハ全く事記たり一時の
事まて此なるハ此大国巳貴神の言ゆ就て此ゆ其執計しふ可き旨を伺ゆ上給へるまて別なり第六
ゆハ天神より行ひ下し給へる此時の大御政なり其

ハ第二の一書ハ皇祖天神より故更條々而勅之夫汝所
治顕露之事宜是吾孫治之汝則可以治神事又汝應住
天日隅宮者今當供造即以千尋捕縄結為百八十紐其
造宮之制者柱則高太板則廣厚又將田供佃又為汝往
来遊海之具高橋浮橋及天鳥船亦將供造又於天安河
亦造打橋又供造百八十縫之白楯又當主汝祭祀者天
穂日命是也と見えたりハ経津主神武甕槌神の天神
の御命を持て還降り給ひ大巳貴神の先ゆ乞給ふ所
ゆ任せて其御返事を如此く仰下されたりなり然し
て出雲風土記ゆ楯縫郡所以号楯縫者神魂命詔之十

足天日栖宮之縦横御量千尋拷縄持而百結〻八十結〻下而此天御量持而所造天下大神之宮造奉詔而御子天御鳥命掬部為而天降下給之尓時退下来坐而大神宮御装束掬造始給所是也仍至今掬挓造而奉於皇神故云掬途と見え又出雲郡杵築郷郡家西北廿八里六十歩八束水臣津野命之國引給之後所造天下大神之宮将奉典諸皇神等参集宮處杵築故云寸付神亀三年改字杵と有ふども此時の事ゆへ此大巳貴神を國避らせ奉るとしてい其神の申させ給へる任ま先其造宮の御事を寅初ま仕奉るれしまて此まハ稲背脛命ハ更

△上野国神名帳ま扳鉾君御子明神貫前若御子明神香取若御子明神ふと申す若御子の君ふりて

ふり件の二神を荒振神を攫平げさせ給ふ事をハ次ふして専此御事をこそうハ急ぎ仕奉らせ給へりけり其證ハ同郡美談郷郡家正北九里二百四十歩所造天下大神御子和加布都怒志命天地初判之後天御領田之長供奉坐之即彼神坐郷中故云三太三神亀三年改字美談と所見たる和加布都怒志命と申すハ必経津主神の御子ま御在〻坐けむを此時天神より天御領田を大巳貴神ふ属させ給へるゆ其長として仕奉らしけれバ自然其神の御子ところハ申せりけれ實まハ従神ま坐す謂ふり然〻して其天御領田と云ハ此第二ノ一書ま又将

田供佃と有る是より後世に謂ゆる圭田（ミトレダ）の始なり田

傳十九二十二丁に注るが如し右の粉藁郷の下に八束水臣津野命之国引給之後と云い美談郷の下に天地初判之後ふと有ハ其郷と云傳ふる任に書せる者なりければ抱る可らざるなり神名式に謂ゆる美談神社是和加布都怒志命を御在し坐を同社比賣遅神社と有ハ養蚕の事を以て仕奉る神に坐ます播磨風土記餝磨郡伊和里の下に蚕子落處者即号日女道丘と有て古に蚕の異名を比賣遅と云りと思しければ有り又並びて縣神社同社和加布都怒志神社と有る縣神社も三談持に坐り右の御領田の由に依て大巳貴神を縣神と申して祀れる又二十二社注式平野社條に縣神天照太神子穂日命と見えたり是なり

第七に八右の天神の御趣けに就て大巳貴神より御對申させ給へる御事なり右に引る第二ノ一書に於是大巳貴神報曰天神勅教慇懃如此敢不



従命乎吾所治顯露事者皇孫當治吾將退治神事乃薦岐神於二神曰是當代我而奉従也と有ハ此に大巳貴神の（改吾亦奉避）如吾防禦者國中諸神必當同禦令我奉避誰後敢（後）有不順者と有ハ右に天神勅教慇懃如此敢不従命乎と有る事と同じく次に乃以平國時所杖之廣矛授二神曰吾以此矛平有治功天孫若用此矛治國者必當平安と有ハ右に乃薦岐神於二神曰是當代我而奉従也と有に當れるを抑此矛ハ一も大倭神社注進状に傳聞八千戈神者大巳貴神命以廣矛為杖令撥平豊葦原中國之邪鬼是時大巳貴命号曰八千戈神と所見乃る

が如く此神の八千戈神と聞えさせ給時杖歩行させ給へり神物なり田傳廿九十丁に注るが如し然る其系ハ岐神の御霊を託させ御在坐が故に國土に在ゆる荒振神ハ其御威威を畏て恐る故有を以て二神に薦めて其廣系を奉らせ給へる由已に傳十二百二十八丁又上六十二百七十一丁五丁に委しく注るが如し然れば二神の荒振神を御言向為させ給へるも大已貴神の御力を副させ給へる御事にて右の天神の御處分御在坐る後の事と見えて其出雲風土記に意宇郡母理郷郡家東南廿九里一百九十歩所造天下

大神大穴持命越八國平賜而還坐時来坐長江山而詔我造坐而令國者皇御孫命平世所知依奉但八雲立出雲國者我静坐國青垣山廻賜而玉珍置賜而守詔故云文理神亀三年改字母理と有ハ已に國土を避り聞えさせ御在坐ふが〳〵猶越八國ハ國作坐始より事共所知食御在坐が故に國避の以前に如此く御言向の御事ハ御在坐けるなり其由ハ事の因に有て傳三十百下に已に注したりき又同郡拝志郡郡家正西廿大神命将平越八国為而幸時此處樹林茂盛尓時詔云吾御心之波庚志詔故云林神亀三年改字拝志とも有り其記に八十神を言向給へると此に有を以ても大化ふ〳〵ぬ兵事にて在坐を思ふ可し大已貴神如此く

天神の御為に至忠を盡させ給へる者を人は知ずてあむ第八は大巳貴神の天日隅宮に鎮ませ給へる御事なり御紀に紀は今我當於百不足之八十隈將隱去矣言訖遂隱と有る是なり第一の一書に曰吾將自此避去即躬披瑞之八坂瓊而長隱者矣と有る此披字を被に作れる本の有が為に瑞之八坂瓊を負持て隱り坐る如く人の思惑ふ事なるが披は於彼氏と訓て其玉を置て給へる由なる事傳廿九六十八丁に注るが如くなれて此玉を天神の御許に奉くりけるを天神御子に傳りて崇神天皇六年御紀に先是天照大神和大國魂神並祭於天皇大殿之内と有る御是ふ

り大倭神社注進状に傳聞倭大國魂神者大巳貴神之荒魂中略在大倭豐秋津國守國家因以号曰倭大國魂神亦曰大地主神以八尺瓊為神体奉齋焉と見えたる如大和神社の神体と齋れさせ御在て坐けるなり右に也も注るが如く平國之廣矛は一も巳に二神に奉らせ給へるが上に猶出雲神賀詞に大八島國現事顕事令事避支乃大穴持命乃申給久皇御孫命乃静坐年大倭國申天巳命和魂乎八咫鏡に取託天倭大物主櫛甕玉命登名乎称天大御和乃神奈備に坐巳命乃御子阿遲須伎高孫根乃命乃御魂乎葛木乃鴨能神奈備に坐事

代主命能御魂乎宇奈提ニ坐賀夜奈流美命乃御魂乎
飛鳥乃神奈備ニ坐天皇孫命能近守神登貢置天八百
丹杵築宮ニ静坐支と有て此時ニ其和魂神以下御子
神等をも各鎮め聞えさせ給ひて已命ハ天日隅宮ニ
如此ふゝ鎮〳〵せ御在し坐ける此時其后神と御在し
坐る三女神も共ニ御身を隠させ給へる由ハ已ニ傳
十五三百四十六丁ニ注せる筑前風土記ニ宗像大神自天降
居ニ崎門山之時以青瑣玉置奥津宮之表以八坂瓊紫玉
置中津宮之表以八咫鏡置辺津宮之表以此三表成神
體之形納置三宮即隠之因曰身形郡後人改曰宗像と

と有も此時ニて實ニ幽顕の界を分つ事此度ニこそ
ハ有け〳〵然し此時の事ハ一も幽と顕とニ世の五替る時ニ成りけれ中ニも容易き事ニ
ていハ非りけりを右等の事共をハ一朝一夕の事と思
ふハ深く此所ニ力を入て見さりけるが故ありけり
第九ニハ大巳貴神の御行方の御事共ニ成り右の傳し
の趣を此彼比校ぶる時ハ百不足之八十隈ニ隠坐す
と云ハ即杵築神宮ニ鎮ま〳〵せ御在し坐るにて在ふ
り若て此を天日隅宮と申すハ傳十五三十一丁廿三三百四十
六ニ注せる伊弉諾尊の幽宮素戔嗚尊の熊野宮の例
にて顕御身の此土を避〳〵せ給ふ時ニ當りて其御霊
を留置せ給へる宮ニ日隅ハ潜匿(ヒソミカク)しさせ給へる由

の宮号あるを思ふ可し偖大倭神社注進状に引る御
紀に今我當於二百不足之八十隈一將隱去矣言訖即躬披
瑞之八坂瓊而長隱常世鄉者矣と有り今有る諸本に
ハ無き事にて常世鄉と云ハ即八十隈を云て人目の及
ばぬ境を云事なるが又轉して外蕃の事をも云る
由傳廿九十百丁に注るが如し偖傳廿六九十九丁廿九百
十丁に注るが如く園韓神と聞えさすり韓神と申す
ハ大巳貴神少彦名神二柱に渡らせ給ひて外蕃諸國
を巡造らし給へりと以て称奉れる御名なり然るに
少彦名神の渡らせ給へる由ハ上章第六の書に所見

たるを此大巳貴神の物為給へる事右の如くハ此ふ
國を天神御子に避奉らせ給ひて偖ふむ外蕃にハ渡
らせ給へりけらし此より外に證と為へき事なてハ
樂家に傳ハれる古説ふむ有ける道調の散手破陣樂
一名王皇破陣樂を古より傳云ふ昔牽川神海を渡り
て新羅國を破らせ給ひし形を象りしなり云こと有
ハ大神氏家牒に大物主神大國魂神等なるが大巳貴
神ハ更ふも申さず其和魂神荒魂神も渡らせ御在し
坐る状なれば況て其后神等御子神等も物為給ひけ
む事申すも更なり彼文徳天皇御世に當りて大巳貴

神火彦名神の東海より常陸國に遷らせ御在し坐けり首尾の事共に心を著て考ふ可き者あり（平田氏の三五本國考に西蕃に謂ゆる三皇五帝の三皇は伊弉諾尊伊弉冊尊素戔嗚尊にて御在し坐し五帝の大昊氏は大国主神に渡らひ給ひ其后の女媧氏は須世理毘賣命に當りと云て說を成せるは甚こ愛たき考なふも有（第十五）けり）若て其大巳貴大神八百丹杵築宮に鎮らせ御在し坐しの後に其神宮の御為に御厨を仕奉りて大神を齋奉らしけむ出雲風土記に楯縫郡佐香郷郡家正東四里一百六十歩佐香河内百八十神等集坐御厨五給而令醸酒給之即百八十日喜讌解散坐故云佐香と見えたり是（然るに）あり又古事記にも於出雲國之多藝

志之小濱造天之御舍而水戸神之孫櫛八玉神化為膳夫献天御饗之時鵠白而櫛八玉神化鵜入海底咋出底之波迩作天八十毗良迦而鎌海布之柄作燧臼以海蓴之柄作燧杵而鑽出火云是我所燧火者（於）高天原者神産巣日御祖命之登陀流天之新巣之凝烟之八拳垂摩氏焼擧地下者於底津石根焼凝而搖繩之千尋繩打延為釣海人之口大之尾翼鱸佐和ゝゝ迩控依騰而折（拆）竹之登遠遠ゝゝ迩献天之真名咋也と見えたり是も御厨の事と云ふ說あれども（其ハ）如此事猶幾許（ほど）小有（ほど）故此第二一書に天神の當主汝祭祀者天穂日命是也と見えて此時の祭祀

△考るに右の造天之御舍と云ハ次に引る杵築宮の御事なりて此ハ天穂日命の子天夷鳥命の子伊佐我命の妻を稱ハ玉神と聞えて其祖天穂日命ハ業を繼て其大已貴神の祭祀を主る所以なる事下に引て注せるを見べし備其

ハ其神の主らせ給へる事なるを合せて△神賀詞の右に引る八百丹杵築宮に静坐支と有ハ續きて是に親神魯伎神魯美乃命宣久汝天穂比命波天皇命能手長大御世乎堅磐に常磐に伊波比奉伊賀志乃御世に佐伎波閉奉登仰賜志次乃隨に供齋仕奉氏朝日乃豊坂登に神乃礼自利臣能礼自登御禱乃神宝献良久奏と有ハ其大神を鎮め奉りて復奏し給へりし傳ふるなて此時の神乃礼自利と云ハ右の平國之廣矛と瑞之八坂瓊と八咫鏡との三ふる事予已ふ祝詞講義に委しく注し如りき其より愛以降天夷鳥命より次々相承て神代の受たき逆迹ゝ倣ひて出雲臣の世

（せうを下六百七ふも其大已ハ説べきなり）

△二神の報命ふり

△郡家東南廿二里二百卅歩布都怒志命之国巡坐時来坐此處命詔是土者不止欲見詔故云山国也

に朝廷ふ参上りて礼代の物を貢りて神賀詞を奏せる事ふるを次に小其品目ハ多く成れいとゝ實ふハ右の三種ふる事有ふり第十一ふハ第二の一書ふ謂ゆる故経津主神以岐神為郷導周流削平有逆命者即加斬戮歸順者仍加褒美と有ハ彼平國之廣矛を杖歩うせ給ひて荒振神を言向させ給へるふり出雲風土記ふ意宇郡楯縫郷郡家東南廿二里一百八十歩布都怒志命之天石楯縫直給之故云楯縫と有て此間ふ種々の御事御在し坐けるふりけり常陸風土記香島郡條ふ豊葦原水穂國所依將奉上始留ふ荒振神等又石根木立草乃片葉辞語之書者狭蠅音声夜者火炎明國是平事向

（と見え又上国郷ハ）

平定大神従上天降供奉之と有い武甕槌神の御事ふり又信太郡條ふ天地權輿草木言語之時自天降来神名称普都大神巡行葦原之中津國和平山河荒梗之類大神化道已畢心存歸天即時隨身器仗俗曰伊川甲戈乃川恵楯劔及所執玉珪悉皆脱屣留置茲地即乘白雲還昇蒼天と所見たり是經津主神の御事ふり右の乘白雲還昇蒼天とこハ此所ゟ二神共ふ上天ゟ還昇給へるあるが此ふて御身ふ従へさせ給へる物を留置せ給へるハ香取神宮の神体と成り鹿島神宮の靈形と成れりし御物共ふるが國の鎮めふ残させ給へるふて

後世ゟ海外より東埜の地を窺ふ事有を豫て所知食て如此く捉させ給へるるむ妙ふ奇しき御事ふりけるゝ然して先ふ大已貴神の薦め給へる岐神をも天上ふ従へて参上らせ給へるるるむハ道饗祭詞ゟ高天之原ふ事始ゟ皇御孫之命止称辞竟奉大八衢ふ湯津磐村之如久塞坐皇神等之前ふ申久八衢比古八衢比賣久那斗止御名者申氐辞竟奉久根國底國無里麁備疎備来物ふ相率相口會事無氐下行者下乎守理上往者上乎守理夜之守日之守ふ守奉斎奉礼止と有て下ふ神官天津祝詞乃太祝詞事乎以称辞竟奉止申と有を見

奉ふ此祭いしも大巳貴神より二神ゝ廣厚を授け
吱神を薦申さしをを天上ゝ其神を伴ひて其事を奏
させけむ此ゝ依て天神の行ひ定りて皇御孫尊ゝ事
依ー授奉ゝ給へる御改ゝる事灼然きを思ふ可し
然れば此結末ゝ於是二神誅諸不順鬼神等果以復命
と有ゝ右の如き謂の有る事ゝ忽卒ゝ思ふ事勿れ
第一ノ一書ゝ故大巳貴神以其子之辭報予二神二神乃
昇天復命而告之曰葦原中國皆已平竟と有ハ余りゝ
略きゝ過たる者ゝ古語拾遺ゝハ於是二神誅伏諸
不順鬼神等果以復命と有ハ此ゝ同じきゝ誅を誅伏
と書るのミゝ違ひハ有けり第十二ゝハ大物主神大國魂神事代主
神等昇天の御事共ゝ有り第二ノ一書ゝ是時帰順之首渠



者大物主神及事代主神乃合八十萬神於天高市師以
昇天陳其誠欵之至時高皇産靈尊勅大物主神汝若以
國神為妻吾猶謂汝有疏心故今以吾女三穗津姫配汝
為妻宜領八十萬神永為皇孫奉護仍使還降之と見え
又垂仁天皇二十五年御紀ゝ所見たる倭大神の御言
ゝ大初之時期曰天照太神悉治天原皇御孫尊專葦原治
中國八十魂神我親治大地宮者言已託焉と有ハ此時
の御期ゝり然して出雲風土記ゝ意宇郡飯梨郷郡家
東南卅二里大國魂命天降坐時當此處而御膳食給
故云飯成神亀三年改字飯梨と有ハ右の事ゝ相合す可き傳説

ふり若て其大物主神の御事ハ駿河風土記伊穂原郡
御穂社所祭大巳貴命又号御穂津彦御穂津比咩命也
と有て次ぎ羽車磯田社離宮也大巳貴命天孫降臨之
機為顕其時大巳貴命登天上奏可順條こ忽象御天日
鷲大羽鷲羽車休御穂御崎云々と所見たり是ふり此
ぎて二神の初て天上より天降り坐てより大巳貴神
の國避の御事を終させ御在し坐て天上に復命し給
へり迄凡て十二條ふり但此ハ其大抵を十二條に刻
り事共を至りていと云限に非ず此其御紀の見る次
第を示さひとてふり本より平田の古田史と云る物
ぎハ抱る事無くして古書を以て
古書を攻る時ハ如此く成ふり　○二神ハ右の経津主

主神武甕槌神を申すふり此次ぎ謂ゆる天稲背脛と
云ハ天夷鳥命の御事にて共に御在し坐けり事已ぎ
上四百三十五丁に注るが如し然るに古事記にハ小天鳥船
神副建御雷神而遣是以此二神云々と有ハ経津主神
の傳無ればふり此紀の如くハ此の三神と記されず
てハ得有まじき所なるむ○五十田狭之小汀第二一
書ふるも然り伊弉佐之小汀と訓む事にて那と多と
ハ通音ふり故ふ然も云るや古事記にハ伊那佐之小
濱と作り即上章第六ノ一書ふ謂ゆる五十狭々之小汀
ふる由傳三十十百丁に注せり通證に神名式出雲郡

因佐神社風土記作伊奈佐之社杵築神社記曰國司藤原家任日記云大木等稲佐浦五十田狭小汀是也と注されたるが如し記傳十四ノ九丁に伊那佐の名義未思得ず若し諾否(イナヤ)の意にて大國主神の諾否の答を問賜ひし處なるべし負る名ともや有む仁賢天皇六年御紀に諾字を勢と訓り万葉十六ノ九丁に否藻諾藻と詠る諾字も勢と訓つ可し敏達天皇十三年御紀に屈請を伊那勢氐と訓るを猶後撰恋五に親の守りける女を否(イナ)とも諾(セ)とも云放てと申ければ諾否(イナセ)とも云放たれず憂き者は身を心とも為ぬ世なりけり」と有り此歌伊

食意同じく又和名抄郡名遠江国引佐伊奈と有り万葉廿五ノ十七等保都姿布美伊奈佐保里江乃と有る地名が其並なる康玉綱根と云郡有り荒魂と云事なり神名式に引佐郡射前神社大穴神社なども有る号ふる其も神代小戦なども有し地名を以て諾否(イナセ)なる負なる可きなど事い異りなるべし皆

勢集なり人數とも為ぬに添て志甚深く有て男文を遣すれど返事も為ざりけれども有て諾否とも云こと有り奥儀抄に勢といい諾すら意なりと見えたり補意

と云れき猶古事記白檮原宮段大御歌に多〻那米豆伊那佐能夜麻能と有は揖並而より射と云へ係て伊那佐能山と云地名に続けさせ給へるなるが此い戦を為させ給ひて其不(可)を定めさせ給ふ意を以て其地名に負せ給ひたる可(くて)も此ノ由有て通えたり猶下五百三十五丁稲背脛命の傳に考合す可し記傳に風土記抄に伊那佐之小濱は杵築郷の内假宮村と云所なり此辺の南を俗傳に伊那佐濱と云り」と有り亦も二三度其国に物し

○又此地名と成れる君へ稲背脛命を御在し坐ふる可し下稲背脛命の所考合す可きなり

つゝ度毎に其稲佐社へも詣奉けるに祈禱より日御崎の方へ行く道にて謂ゆる宇迦山の麓に在れば當昔大国主神の御在し坐けるを宇迦之山本宮といふ甚近くて便理ふるが故に此に著せ給へるなりけり其社の祭神は経津主神武甕槌神の二柱に渡らせ給けるとぞ○小江は記傳十四十七に

凡て小川小田小野ふども云ふは万葉に難波の小江ふども詠て必少うねども小初瀬小筑波ふどの類皆称辞の如し其は本は細小きを云言ふるが称辞とも成れるなり下畧と有り予が思ふには其用有て差す地の限り云称ふゝ可くや例を得て定む可くこそ

○抜十握劔は古事記にも抜十掬劔と有れば二柱神共に同じ状に各其十握劔を抜せ給へるなりけり○

倒植於地は私記に左加之万尓津知尓豆支太天豆と有り金澤本には地尓倒植氏と訓る方宜し其事次に云べし古事記には逆刺立千浪穂と見えたり備此に地と云は其五十田狭之小汀を云ふり斯る所に地と云例は古事記素菟段に故汝者隨其族在悉率來自此島至氣多前皆列伏度尓吾蹈其上走乍読度略今將下地時と有る地是なり万葉五十二に多那礼乃美巨騰都地尓意加米移母六三十三丁に零者雖益地尓落目八方八二十一丁に松風疾地尓落良武又二十六丁来不喧地尓令落常香又（又下徒地尓令敷者又言花橘半地尓落津五十七丁）先咲花乃地尓將落八方十九丁に徒地哉將

○後の物も空穂国譲下ニ得上り給ハて下ル立給ハれハ君等ハ然ふぞ〳〵土ニ立給ハり俊薩下ニ此ふハ丈丈有クハ地何ニ土ワ立ラず〳〵と拾玉集ニ向討り遊陸ニ雪の積〳〵て土ニ著行く庭の松ハ枝指遠見外ニ清初神ハ知ず荒金の地より成れる男の海山ハど有り

隨見人名四二十二ヶ所ふ吾有者地庭不落登消生十九
三十ヶ所ふ之米家年毛美知都知尓於知米也母二十四ヶ所
ふ和我豆布礼奈ニ都知尓於知母可毛又四十四ヶ所麻都我
延乃都知尓都久麻渥尓ど云ふ地ハ廣く天地尓ど云
と ハ異ふて唯ふ土の上と云程の意味ふりふて軽く
云ふ者ふり其ハ十四卷十八ヶ所ふ波奈知良布已能年
伎美我奥母賀母と有て右ハ地としも可都平乃平那能平能比自尓都又佐麻提
云ふ所ハ此ハ比自と云ふて知べし○倒植ハ神武
天皇戊午年御紀ふ部靈を天降させ給へふ御事を明
且依夢中教閑庫視之果有落劔倒立於庫底板と有る
倒と同じくして其器の順逆ふ就て云ふ逆ふり古ふ

ふも天上より降し給へふふれば其倉の底板を貫き
ふ俯ふ其鋒の下ふハ順ふふふ其底板ふ劔柄の立て
其鋒の仰ぎて有し故ふ逆と云ふり此も其如くふ
て劔鋒を地ふ刺ガ順ふり其とハ異りて地ふ劔柄を
置て劔鋒の直ふ上ふ向ひて立りガ故ふ古事記ふ毛
逆刺立于浪穂と有を記傳十四ヶ所ふ逆刺立とハ劍ハ
鋒を以刺す物ふふふ是ハ柄の方を刺立ふ故ふ逆と
云り」と注されたり植字を都伎多都と訓ふ此言ハ古
事記御禊段ふ故於投棄御杖所成神名衝立船戸神と
申す衝立ふ同じく古事記の刺立と一事ふふり但此ハ地

と有りより古事記ハ浪穂と有る方ハ勝りたるらむ
此ハ天神の御使と為て天降らせ御在し坐けり威靈
を國神ハ示させ給ふ所ふれがゝり浪穂の事ハ傳三
十十　百　丁ふ委しく注り此茅六ノ一書ふるとも其於秀起浪穂之上起ハ尋殿而手玉
玲瓏織紝之女女者云ふと有て天神ふるゝても浪の穂
の上ハ尋殿を建させ給へる事の有けるをも思ふ
可きふりゆハ古事記の浪穂の方を取と云ハ取通證
ふりゆハ引れなり杜氏通典ハ唐敬樂を載て極話刀鋒
衝植於地と云ひ勇燈餘話ハ植刀於地と云るハ御死
より後の事ふがう已く然る字の有を取るれけむ
と思しき疑し　○踞其鋒端ハ私記ハ曾乃左支ふ志利
有けれいより
宇太介豆又宇知安具美ふ井天と訓り備此鋒端ハ古
事記ふハ劔前と有り其肥河段ハも以御刀之前刺割

と見えたりければ前ハ備字まて鋒の義ふりふりけ
り然して此の鋒端ハ四神出生章茅六ノ一書ハ謂ゆり
劔鋒の事ふりけれバ古事記と合せて劔能佐伎と訓
む事然る可く所思ゆ備右の志利宇太介豆ハ金澤本
の訓も此ハ同じ記傳十四十一丁ふ踞ハ志理宇多牙ふ
り志理宇多牙とハ尻打擧ゆて跖を地ハ著て膝を立
て臀を浮擧て坐をも云べけれども敏達天皇十四年
御死ハ踞坐胡床用明天皇元年御死ハ踞坐胡床ふど
有ハ然ハ聞えず是ハ俗ハ腰懸ると云者ふり物語文
ふどゝハ尻懸と有り其ハ足を垂て臀を物ハ上るふ

れバ尻打拳と云ふる可し字書ニ據物坐曰踞と有る
是なり據物とハ腰を懸る事なり漢ニてハ其をも坐
と云ふ常の事ゞ然れバ書紀ニ踞其鋒端と有ハ劔鋒
ニ腰を懸坐るなり補意と云れたるまて甚明らけし又
宇知安具美尓井天ハ官本の訓是なり海宮遊行章第
八ノ一書ニ於内床則寛坐と有をも安具美尓井留と訓
り又古事記ニも此を跌坐と有を記傳ニ阿具美韋氐
と訓へし宇知阿具美ニ打てふ言を添るも亞し阿具
美ハ足を結む事なり今世ニ丈六ゝくと云ふ坐様な
り跌字ハ佛書ニも結跏跌坐ふど常ニ云て阿具美ハ





允當れり丈六のくとハ丈六の佛像の跌坐より出た
る可し又是を世ニ阿具良加久とも阿受久美加久と
も云り阿受久美ハ足組ニて阿具美ニ同じ偖此阿具
美居ニ二有り組たる足の末を膝下ニ敷くと膝上へ
拳て踞を仰けて組むとなり又膝を脇へ張て左右の
踞を合せても坐るも此も跌の類なり取意と云れたるが
如し故右の如く劔鋒を御座と為て踞させ御在し坐
けるハ口訣ニ顕勇状問報命也と云るハ然る事なが
ら上四百三十六丁ニ注せるが如く此二神ハしも共ふ狡威
雄走神の御子ニて渡らせ給へれば本より劔と同体

△事記ニ建御名方命ヲ御手ヲ令取給ヘバ取成立氷ト云取成劔刃ト云程ノ御事ニテ坐ガ

ふて御在ー坐す故ふ其鋒端をも假の御座と為て立
も居も御心の任まゝ御在ー坐けゝー生賢ー き尋常
の凡心を以て測知り奉る可らざる御事ふふむ有
けり記傳ニ今此神の如此為給ふハ皆天神の御使の
絶れて奇ー く畏ー き威德有る事を示ー給へる
ありと云れき此時ニ大巳貴神ハ坐ー て向ハせ給へ
りけむを胡床ゐどゝ踞坐るが如く劔鋒を以て其席
と為給へるふハ實ニ天
下を一呑ニ為と云べー ○問(ハ)大巳貴神曰ハ次ふる
汝意何如當須避不と云へ係て心得べー 故古事記ふ
ハ問其大國主神(ロ)言天照太御神高木神之命以問遣
使之と有て此神の為ニ征伐の御使ヒ為て降らせ給
ふとふハ非ら由を如此懇到ニ聞えさせ給へるりて

上件條ニふ注るが如く此大神始より天神ニ背奉ら
せ給ふ御心御在ー坐す又天神御子ニ此國を避奉ら
せ給ふ御心の御在ー坐ざるニハ非れども未其神を
治めさせ給ふ御處分の未究らざりけるが故ニ度ゝ
の大御使有て事の約りに至れる所ふるを以て殊更
ニ問使之の御言を宣ひ入させ給へるふり即大祝
詞ニ國中ニ荒振神等波神問志(イ)問志賜(ロ)神掃(ハ)掃賜
比(ニ)と有ふ大巳貴神ハ荒振神の例ニハ非ずと雖然事
を分ちて委ー く云べき所ふらざるが故ニ大凡ニ云
ふるが其神問志と云ず此ニハ當れりけら後釋ふ

此所神掃云々は荒振神と係り神問云々は大名持命
と係れり然れば云々神平波神問志尓云々荒振神等平波神
掃云々と分て有べき事なりと唯荒振神等とのみ有
は大名持神も荒び給へる如聞えて如何ぶれとも語
を省きて如此も云べきまゝ又思ふに此も荒振神と
云るは書紀に謂ゆる殘賊强暴横惡之神の類のみに
は非ず凡て天神に順ひ依來ずして疎こしき神を
汎く云るに當昔大名持神も未天神に歸順ひ給はざ
りし程なれば然云べし略と見えたり但出雲神賀詞に荒夫留神等
乎撓平氣國作之大神乎毛媚鎮天云々と見えたれば
右の意なも在れ大巳貴神を荒振神とは云ず然れば

大祓詞なるは然事を分ち云所なりとて見る可き○高皇産靈尊は此正書の
例なるが第一の一書に天照大神のうたゝ擧られき第
二の一書に天神と有は二大神に亘る可し古事記に
右に引る如く天照太御神高木神之命以て有るず調
ひたる狀なりけり但此は何れの所なるも然有べき
例なるなり○欲降皇孫君臨此地上に故皇祖高皇
産靈尊遂欲立皇孫天津彦火瓊瓊杵尊以為葦原中
國之主と有る所に應なる文なり上五十一丁に注せる事
共に考合す可し君臨此地は私記に已乃久尓と支美
太良之女年止須と有り天上にては欲為葦原中國之

主と詔給へるを二神の此所ふ御在ーしての詔命を
述給ふ所なるが故ゆ君臨此地とハ宜へるあり此字
ハ四神出生章ゆ素戔嗚尊の御事ゆ汝甚無道不可以
君臨宇宙と有を其第二ノ一書ゆ假使汝治此國云こと
有て此國を所治着せ給ふ御事を申せるあり孝德天
皇御紀大化二年詔ゆ夫若於天地之間而宰万民者云
こ同三年詔ゆ惟神者謂隨神道我子應治故寄是
以典天地之初君臨之國也云こふど見えたり但君臨
字ハ君登令坐年と訓べーし（私記ゆ訓る如きい漢籍訓の狀ゆ近し金沢本ゆハ君
登志麻佐年と有も言足ハざるが如し此字尚書ふ出て君臨周邦と有て天下ゆ君と坐て万民ゆ臨ませ給

ふ義ふ取て用ひさせ給へり古事記ふハ此を汝之宇志波祁流葦原
中國者我御子之所知國言依賜と所見たり此ふて君
と坐て所知食と主と為て領居との差別を見べきふ
り記傳十四十二ふ宇志波祁流ハ主と為て其處を我
物と領居るを云ふ但天下の天下を所知食ア事ふど
を宇志波伎坐と申せる例ハ更ゆ無しバ似たる事ふ
ぐる所知食ふどゝ云とハ差別有る事と聞えたり波
久ハ佩刀著沓ふどの波久と同トくて身ゆ著て持つ
意ふゝむる取るハ本手ふ持つ事ふるこ今世ゆ國所
を領ずるを某處を取る幾万石取るふど云も此の波

久と意通へり備此言万葉五三十一丁ニ宇奈原能辺尓母
奥尓母神豆麻利宇志播吉伊麻須諸能大御神等六十三
六ヶ丁ニ住吉乃荒人神舩舳尓牛吐賜九二十三丁ニ此山乎牛
掃神之十七三十九丁ニ須賣加未能宇之波伎伊麻須尓比
可波能曽能多知夜麻尓十九三十六丁ニ墨吉之吾大御神
舩乃倍尓宇之波伎座ふ尓も有り迂却崇神詞ニ山川
能清地尓迂出坐ふ五吾地止宇須波伎（）坐止云ふと有
も須と志と通音ふて同言ふり取要と云ふなるが如し
然るハ傳廿四五十五丁廿九十丁ニ注し奉るが如く此神
ハしも御父大神の御事依を受奉ふて給ひて大國主

大神ふてハ渡らせ給へれども天津日継の御事ハし
も御父大神の御誓ニ成坐る天神御子ニ定まらせ御
在し坐れば自立せ御在し坐す状まて宇志波祁流と
ハ詔給へるふり是大國主神まてハ御在し坐ふがら
天下を所知食すふどと申す筋とハ異ふりけら所以
（皇の天下を師ゐて食国）
ふも御在し坐けら其外ニも右の例共ふろハ誰が依
人と成て領居らを云事まて我より上ヶ君長の有て
其まり依されたるとバ然云ざる格の言ふり備又其
宇志と云ふ事の説い傳十巻二百四十九丁ヶ注り考
合す可し然して其大人と云ハ長者の義ふる者ふり
我御子之所知國言依賜右ヶ注せら此の欲降皇孫君
臨此地と有と同し意まて云状の異有ふり抑所知と

云ハ君主ヨリ限奉レリ御事ヨリテ已ニ八洲起元章第一ノ
一書ニ天神謂伊弉諾尊伊弉冊尊曰有豐葦原千五百
秋瑞穂之地豈汝往循之之有ラ循の言是ヨリテ此ヨリハ
深き所以有ラ事傳七五十十九百一廿九四百七十五丁ニ注セ
ラ如クヨリ其ハ置テ凡テ此國土をも天下をも所
知食と申すハ唯天皇御一所のミ御在ー坐ケラ第
ノ一書ニ天照大神因勅皇孫曰葦原千五百秋之瑞穂
國是吾子孫可王之地也宜爾皇孫就而治焉と見えた
ラ治是ヨリ其ハ傳世二百三十六丁ニ注テ説べき事ふれど
モ少ク此ヨリ云べー古事記ニ坐畝火之白檮原治天

下也と有を始奉りて歴世の天皇尊等の御上ニ然記
ー奉ラるミ例ヨリるフ明宮段ニ至りて即詔別者大山
守命為山海之政大雀命執食國之政以白賜宇遲能和
紀郎子所知天津日継也と見えて改ニ為とも執とも
有ハ天皇の大御政を申給ふ由ヨリるニ天津日継ニ所
知と有ハ其食國の事を政ごと申すを所知食させ給
ふ謂ヨリを以て其差別有を知べー若て所知食と云
ハ其白檮原宮段ニ坐何地者平聞看天下之政と聞食
と同ドくて一ハ召て知給ふ由ヨリ一ハ召て聞給ふ
由ヨリ共ニ君主と御在ー坐て臣民より奏す所を聞

知ー御在ー坐て其行下ー給ふ大御政御在ー坐す謂
是ふり備其賣須を袁須とも云ふハ傳八六十七丁十六二十八丁
ゝ注せるが如く天皇の天下を所知食す御上ゝ就て
食國と申ー又國袁斯須と申せる是ふり万葉五廿ふ
企許斯袁周久尓能麻保良叙十八十八丁ふ伎已之乎須
久尓能麻保良尓ふど見え靈異記ゝ磯城島金刺國宮
天皇又聖武天皇之時之又
食國天皇ヲスクニ又ハ警余譯語田食國云ゝ諸樂宮食國帝姪阿倍
天皇代ふど有て食國を久尓乎師須と注せり即万葉
一二十二丁荒妙乃藤原我宇倍尓小食國乎賣之賜年登十八二十三丁ゝ美與之努能
許乃於保美夜尓安里我欲比賣之多麻布良之二十六十丁
久尓乎師之

ふ於保吉美能賣之思野辺尓波之米由布倍之毋又六十二丁於保吉美乃都藝呂賣須良之多加麻力能努敬美流
其等尓ふど有を以て其意同ぢきを曉ゝ可ー故其如
く袁須と云ハ食字ゝ當れるが其ハ佗ふり物を我身
ゝ召入るより云事ふりが故ゝ今も食物の事を世ゝ
賣斯と云も其義ふりふり其も亦万葉八二十一丁ゝ春野
尓授流茅花曽御食而肥座十六二十三丁ゝ夏痩尓吉跡云
物曽武奈伎取食と有ゝ拾穂本食字の下ふ此云賣世
と有ふり此を以て所知食所聞看ふどの賣須ハ召入
させ給ふ義ふりを知べー然ーて其本ハ袁須ふて佗
ふり物を寄せ舎へて身ふ

召入る義は出たる事右は謂ゆる食國又は國表斯須の言は合せて曉る可きふり右の表須と賁須との義を明らるは為さる時は所知食所聞看ふ度は唯は知と聞とある事の知るれざるが為は其說を詳は為は
い至るまで き者ずりし故君王の御前は召れ奉りて天下の大御政を知せ奉り聞せ奉るは御前の事執申す人の職ふり古事記御天降段は思金神者取持前事為政と有は
右は引る執食國之政以白賜と有は同じければ為字此はてい白賜と訓む事を知べし天孫本紀神武天皇即位元年の事を云る所は是日物部連等祖宇摩志麻治命共大神君祖天日方奇日方命並并為申食國政大夫也と有て下は但申食國政大夫者今之大連大臣是也

と見えたる正は如此き状なりしなりけり記傳世一二十二丁に引れたる続紀第十三詔は又御世と云に當天天下奏賜ひ國家護仕奉流事乃豚在臣等知乃云と第世六詔は又祖父大臣乃明久淨岐心以て御世累て天下申給ひ朝廷助仕奉利多夫事平第五十一詔は自今日者大臣之奏之政者不聞看夜成年自明日者大臣之仕奉儀者不看行夜成年と見え万葉二三十五丁高市皇子尊城上殯宮之時歌は吾大王之天下申賜者五二十五丁は余呂巨余尓伊麻志弖麻比提阿采能志多麻手志多麻波祢美加度佐良受巨又三十一丁神奈我良愛之盛尓天下

奏多麻比志家子等撰多麻比天十九四十ヨ古音尓君
之三代經仕家利吾大王波七世申祢ふど見えたり是
よて天下の事を執申すを云ふり（聞書ニ大納言義解ニ納下言於上宣上言於下せと有と）和名抄ニ大納言於保
伊毛乃万宇須豆加佐　中納言奈加乃毛乃万宇須豆加佐　少納言須奈伊毛と乃万宇之
有も右等の事ヨ因て起れる官名ふるまも思合す可
ー民部省式ヨ凡免除雜官物符下省者即承知符先下
所司若有執申十五日以令勘申と有ハ執申ハ世ヨ云
ニ執奏執達の義ヨて事を取次て君ニ奏すを云ふり
此を以て人臣の天下の大御政を執申して天皇ヨ所
知看しめ奉り其仰事を承りて下ヨ行ふが故ニ白



賜ふハ云ふり然ルに鎌倉以来武将ふど（攝政申さる類）の事を天下
所知食ふどと云い大ふる名分の誤ふりよて正しく
い右等の例共を正して天下申給ふと云むこと賞ふ
相應（應）ハる名称ヨハ在けれ右件宇志波久と云い自立
居を云ひ所知食ふを云へハ右の如く臣民の上ヨ立せ
御在し坐て其執申す事共を所聞看て政ごとせ給ふ
謂ふり白鳥と云ハ君上ヨ仕奉りて万の事共を執
申して天下ヨ行ふを以て云ふり如此く三の差別ふ
む有けりを（山）故先遣我二神ハ天神より遣ハさるく
席ヨ云ふり
申と宣ひ入るよて古事記ヨ問（由）使之と有ヨ同ド其
日代宮段倭建命の熊曽建を誅ハせ給ふ所ヨ於是白
言汝命者誰と申せるヨ答させ給ふとして糸詔吾者

中略名倭男具那王者也意礼熊曽建二人不伏無礼聞着
而取殺意礼詔而遣と有る遣は同ト○駈除平定は私
記は波良比之豆女之年と有り金澤本は平定を多
比良豆志年と訓り即上は吾欲令葦原中國之邪鬼と
有を此は兼る所あり其由は上八十一丁は注せり偖駈除
は第一一書は二神の御事を先行駈除と有り履仲
天皇御紀は遂欲除と云事有り即此は國中荒振
神等波神問志賜神掃と賜比迂御崇神詞は是以
天津神能御言以氏更量給氏經津主命健雷命二柱神
等平天降給比氏荒振神等平神攘と給比神和と給氏と

見えて其は然計り事を分ち云べき所ふるざる故は
大已貴神の御事をも合せて一は云る由右五百十一丁問
大已貴神曰の所は注る如くふるを此は駈除と平
定とは分ちて二は聞べき法有り神賀詞は荒振布神等
平撫平氣國作之大神孚毛媚鎮天と見えたれば駈除は
其荒振神は係り平定は大已貴神は係りたる可し然
見る時は平定を私記は令鎮と訓る事実は謂れ有と
云べきなり神武天皇戊午年御紀は坐定酒行を有る
定を志豆麻理氏と訓ミ己未年詔は遂得定安定匡字
と有る安定と此平定と字義同トきを曉る可し其上

大已貴神ハ一も始より天神を敵なひ奉らせ給ふ御心行ひ共を御在し坐さりつれば唯其御心を和し鎮め聞ゆるのミなる事右の祝詞共を或ハ神問志尓問志又ハ神和ミ給ふなど有を思合せ曉る可し然れば此ハ其天降らせ御在し坐けら凡ての御事を係て宣いせハる者と見る可し然らざる時ハ大已貴神をも荒脈神の列ミ畏けれバなり○汝意何如ハ古事記をハ汝心奈何と作り記傳十四十三丁を此御事依の任を此國をバ皇御孫命を献らむと思ふや奈何と問なり」と有が如し如此く問係る意の伊加尓ハ万葉三二十一丁を拷領巾乃懸巻欲寸妹名乎此勢能山尓懸者奈何将有一云可信波伊香尓

安良年七二十一丁ふ大海之波者畏然有十方神平齋礼而舩出為者如何古今雜部人如何ふを問いい山高ミ晴の雲居ふ佗ぶと答へよ後撰恋五ふ思ふてふ言葉如何ふ馴らし不後憂き物と思ハずもがふ拾遺雜春古里の毛無ナラレの岡の時鳥言傳遣き如何ふ告きや枕草子三二十一丁ふ如何ふと問へバ障る事共申ずる十二二十丁ふ如何ふ清爽ふ成り給へりや」と有ふど多し今本の訓を此の何如を伊加牟と有ハさらなり古言に依て伊加尓と訓べし○當須避ハ私記ふ左利末津良年也と有り偖此避字を被用たる例ハ四神出生章第三一書ふ伊弉冊尊の顕御身ふ黄泉國ふ渡らせ御在し坐けら事を神退兵亦云神避カムサレマシヲマノイフカムサカリト

矣と所見なり其放字の義あり古事記八十神段に故
此大國主神之兄弟八十神坐然皆國者避於大國主神
所以避者云々と有ハ其下に故四特大刀弓追避其八
十神之時毎坂御尾追伏毎河瀬追撥而始作國也と見
えたり此を避と云なり備此ハ第二ノ書に汝當將以
此國奉天神耶と有に當る所あるか其大已貴神をし
て此國より外に移住しめ給ふ物の如く誰しも思ふ
めり事ハ在れども然〻ざるなり出雲神賀詞に國
作之大神平毛媚鎮天大八島國現事顕事令事避支と有
り此を云なり然るハ上百四十に注るか如く此程の

御名を顕國玉神と聞えて專顕國の君主の如く御在
し坐て顕事を所知食し御在しなば其御任を避
せ給りて神事幽事を所知食しめ給ふ可き意を含め
て仰入させ給へる御事右の神賀詞に照して辨ふ可
き者なり即其世の狀を改めて顕と幽と事別させ
給へる御政是なり然るを旧説の如く此地を避せ奉
を削り奉れるむきハ其神をして何れの地にハ治
めしたまと為る甚心得ぬ事共なるにこゝろい有け
れ〇不を私記に伊奈也と有り第一ノ書第二ノ書共
に同文にて汝將此國奉天神耶以不と有り即天神の
御命を諾ひて現事顕事を避奉りて神事幽事を治給

良海本は否字と作り

ハむや吾(シカ)らずやと和(イカ)らふ問聞えさせ給へるなり謂
ゆる是神問ある事右五百五十五丁五十田狭之小汀の所なり諾(イナ)
吾(セ)の事に就て注るる如し此不の言の用ひ状い孝徳
天皇大化二年御紀小(現考明神御大島国)天皇問於臣曰其云々入部及其
屯倉猶如古代而置切(イナヤ)不と詔給ひて其勅答を所聞食
せ給へるに似たり此伊那の義い傳十百七十なり注る
ぶ如此く人小是非(イナセ)を問係るよい夜の辞を添る事な
て古今俳偕な思へども思いずとのみ云るれば否や
思い思ふ詮無し空穂國讓上下小今吉日取て御迎
小と聞え給へば落窪一小否や此落窪の君の彼方(アナタ)の

宣ふ事ふい従すして悪うんるうい何ぞ狭衣三十三
下ふ近う卧たる母の驚き合て此な男の氣ひひとり
為れ空耳う乞(イナク)く今日明日御門の(詈て云辞なり)くしき愛し給ふ
可き吾ぞ佛と有う伊那夜い否よと云程の事ふるが
枕草帋五(二十六丁)小明て見れば思ふ可しや否や第一ふ
らずい如何と問せ給へりと有い全く此と同じ云様
ある和訓栞な伊那い否を訓り然の及ふり古字い不
訓ミ万葉集な不言不聽不欲ふどを訓ミ真名伊勢物
語な不知を訓るも義同ト伊那夜とも云り又那を訓
り韻會な不可也と見ゆ」と見えたり史記な否ニを伊
夜ニとも伊那ニとも訓るを索隠な不通者也と
注せり○大已貴神對曰當問我(下ニ)然(上)後將報(上)ハ第一ノ一書な

八對曰吾兒事代主射鳥遊遊在三津之碕今當問以報之と有て云狀ハ異れども事ハ同ときふり古事記ふ八尓答白之僕者不得白我子八重事代主神是可白云〻と有り右ふ僕者不得白と有ハ天神の御命ふ逆らりて給へる如くふれども然ふ非ず豫の御契約ハ一も已ふ天穗日命の天降り御在し坐けり間ふ成て有る事を粗二神の知て御在し坐べるりければ其夏ぶ就て今更ふ聞え上させ給ふ迄ふも非りけむぶ故ふ其御子事代主神の御言を以て御返事を聞え奉らむと給ハむるふる可し然して問我子者令後全也と

注せる其意ふて大神の御上ふ於て少ふ異しき御心の御在し坐るふるずと雖も其數多ふる從神の中ふ順奉らざる者有る時ハ大神の清き御心の隱るる事ふりければ其長子と御在し坐す事代主神の諾否ふ依て百八十神も其御制令の任ふ仕奉らるる事を思ふすぶ故ふりけり其下ふ見えたる國避の時の御言ふ僕子等百八十神者即八重事代主神為神之御尾前而仕奉者違神者非也と申給へるを味ふる大已貴神ハ國土の大君ふて渡らせ給ひ万の事を八事代主神ぶ執申させ給ひけむ故ふ其神ふ任ねて

報命の御言を今問給へりし御事ところは有けめ此
下にも在る瓊々杵尊の木華開耶姫命を御むと為さ
せ給へりし御事を古事記に詔吾欲目合汝奈何答
白僕不得白僕父大山津見神将白と有が如く其女神
の心の底際仕奉らむと思ふ一ぐ御父神に垂
問奉られて其處分に任せ給へるに等しく此にても
大國主神の自申させ給ふ可き御事を事代主神を
て聞えさせむと為させ給へるに同一徹の事に
て其味ハい究り無る可き者なるべし記傳に僕者不得白我子
云々と有を思ふに此時已に大兄年遅神ハ年老坐て
多く事代主神に事を譲給ひて事代主神ぞ真盛に威

勢有けむ故に自の心一にてハ御答を得白し給ハざ
るなりと云れども自諾ハせ給へる事を傍
より物為させて其基を固めさせ給へる神意を考漏されたるなり○事代主神ハ上章
茅六一書に出給ひて御名義まり始て御子孫の事を
に至る迄落と無く傳三十一百十丁に委しく注し奉れ
り偖此大国主大神の長子と申すハ味耜高彦根神に渡らせ
給へるを上るに天稚彦の喪を弔に御在し坐るのに
て終無く事代主神ハ此に始て出させ給ひて御父
神に代りて復奏の御事のみ有て始無き事怪しむ可
し且國避の御事ハ一に天下造給ひし御功業の終に
在ければ其神にこそい問せ給ふ可き御事なりけ

化然るは其神を除て此事代主神一柱の御言を以て
然計の大事をしも定しめ給へるもむ愈以て不審し
き事なりけりと熟思へば上三百七十一下に注せる如く味
耜高彦根神と申すハ御本名にて渡らせ給ひ事代主
神と申すハ和魂一言主神と聞ゆるハ荒魂にて渡ら
せ給ふと云ふ事ハ数年の説なれ愈定むに至れる者
なり然しては此事代主神と申すハ第二の一書に出たる
ハ如く大物主神に對ハせ給へる御名に渡らせ給へ
るハ又其神を大物代主神と申す物代に對へて事代
と申す事なるハ崇神天皇十年御紀に物實此云望能

志呂と見えたれハ事代ハ事實の義なり然しては此い
國避の大事に在けれハ其御本名なる味耜高彦根
神の方にて計いせ給ふ可きに此事代主神の物為さ
せ給へるハ其和魂神を以て事を全く調へさせ給い
む御父大神の厚き御心に出させ給へりし御事申す
も更なり是将大國主神の御心を見奉り知べき御事
の無きなむ御父子二神の御上を云〇遊行ハ私記に
就て甚く心苦しき事なりけり昔より然る方に力を入て見奉る人
由支氏と有り金澤本に然訓り遊字ハ此下の一書
共に遊幸遊息と見えたり其如く虚字なれハ訓に拘
ら可らず〇三穂此云美保此云美保之碕ハ古事記に

御大之前ニ有リ即出雲風土記ニ島根郡美保郷郡家
正東廿七里一百六十四歩所造天下大神命娶高志國
生神意支都久辰為命子俾都久辰為命子奴奈宜波比
賣命而令産神御穂須ニ美命是神坐矣故云美保ト見
えて建御名方命の本居なる事下五百六十六ニ注せるが
如ク又美保濱廣一百六十歩西有神社北百姓家捕志毘魚ト見え又
美保埼用壁峙窟定岳ト有リ若て等ニ島禺ニ当ニ云有を其抄
ニ自三保灘磧可二十八町東海中有島俗呼云島神蓋大
已貴命御子事代主命於二此島一作釣魚射鳥之遊ニ遨
風土記所謂等ニ島是也ト有ハ實ニ事の狀然ラ可く

思えたり右の西有神社ト注せるハ在神祇官の美保
社ニて神名式ニ謂ゆる美保神社是なり抄ニ中御穂
須ニ美命左大已貴命右奴奈宜波比賣命ト有リ其末
官知社ニ三保社有を事代主神及百八十一神ト見え
たり名神記ニ事代主神也ト有ハ此を云ふ猶尋ぬ可
き事なり備當時東ハ美ノ保西ハ杵築迄ハ一聯の島
なりして中ニ一條の潮海通りて在しなば其内海
より傳ひて美保ニ至ル上古の船路ニて在し事傳世
九十百丁ニ注るが如し此ニ式の出雲郡美努麻神社
の傳ニ事代主神杵築より美保へ通ハせ給ふ時因

(云ひ頭注ニ一座事代主神と)
(下六頁ニ云べし)

難風を過せ給へる時に伊弉諾大神を祈らせ給ひ御息を吹せられ速飄別命の御助を乞奉り我が柝築の山を勸請うむと願給へる驗有て其神を祀らせ給ふ旅伏村の旅伏社是なり其時の御船ハ宇賀山の上ふる唐川(カラカハ)と云に在り帆柱も石に化れりと云り其旅伏社ハ式に謂ゆる布勢神社にて坐すや後按の為此に注す者なり又其由にて弥努麻神社を貴船大明神と申す事なれども時ハ同郡阿須伎神社同社神伊佐耶伎神社と並ばせ給へるハ右の所由に依れる者なるべし然れども正しく物に見えたる事にても非れい猶能く正すべき事なり○以釣魚ハ私記に津利須留乎毛知豆と訓り海宮遊行章第一一書に釣魚を伊豆都留

と訓り神武天皇甲寅年御紀に釣魚於曲浦と有に都理須と訓なり古事記海神宮段に釣魚と有を記傳十七六に邪都良須尓と訓べし万葉五二十三丁に多良志比賣可美能美許登能奈都良須等美多と志世利志伊志遠多礼美吉と有れば那都流と訓べきなれども落著ず猶私記の訓に従ふべきなり和名抄漁獵具に釣声類云釣設餌取魚也和名都理と有て釣ハ器の名なるか其釣を垂れて物為るを津利須留と云べし又字鏡に釣伊乎豆と有れば然訓て次なる遊鳥に對へ見るべきなれども思ひしのぶも然なるべし又古事記に釣に魚を取魚と作るを記傳に須那抓理と訓れれども無き漁に云の如正しく

17 古事記天御鄽良段に為釣海人之和大之尾曰熊鷹佐原宮段に者釣を打羽擧来人遇于速吸門と云例を以て訓へきなれども下段に注す

釣を垂給へりと然いえべからず○為樂を和邪登須と訓り四神出生章と以奚為行と有て行字を訓ること等〳〵本素の所行と為て樂しませ給へりあり万葉二十一丁に強作留行事(ワザ)乎知跡言莫若二四十四丁に今耳之行事庭不有七三十五丁に足乳根乃母之其業柔尚八五十一丁吾妹兒之業跡造有秋田九二十三丁に従来不禁行事叙十一十七丁に凡乃行者不思十二十七丁に揮擢之葉曽吾猶寤十六二十五丁に荒雄良者妻子之産業乎婆不念呂十九二十六丁に古尓有家流和射乃久須婆之伎事跡言継二十五十六丁に伊射子等毛多波和射奈世曽あど産業をも云ひ何と無く

其為し行ふ事をも云り若て此事代主神の釣魚を以て樂と為させ給へりい世に海幸と云事を起し弘めさせ御在し坐けるよて本より此神の神性に好ませ給ふ所ありを以て其德を成させ給へりありけり志摩風土記に答志郡伊佐部鱸藪神社事代主命也命得鱸祭天神地祇之地と見えたり此一事を以て万に及ぶし考ふ可き事あり伊佐部と云も漁部の義なり可くや右の傳に就ての較略は傳三十十百丁に已に注ろが如し俗に我大黒と云神像を家毎に祭しり其大黒と云は俗を負き俵を以て御坐と為る等れば此は大國主神に坐す事申すも更なり戎と云は釣棹を持ち鯛を脇(抜)くて石を以て坐と為るあれば

（ハ書ニ又為沙往来遊亟之具高橋浮橋及天鳥船亦用供遊と有りと見るか偽なる事なり阿曾夫と云ふ）

事代主神の此の故事に依て詐たる神像ふこの二神共に狩衣姿の奇しき神像ころい如何ある事ありけ
ルこくまり然る習俗の有来るなるべし○或曰遊鳥為樂ハ諸本大字にて
本行なるを良海本にハ小字なるに従ひて今改めつ
備古事記にハ為鳥遊取魚と二を並べかるを此い釣
魚を本説にて遊鳥ハ一説なり第一之書にハ射鳥遊
遊と有て漁の御事見えず然して遊鳥ハ私記に止利
乃阿曾比平と有り○記傳十四十四に鳥遊ハ野山海川
に出て鳥を狩て遊ぶを云なり此ハ海邊なれば立て
水鳥を狩るなる可し朝倉宮段大御歌に夜須美斯志
和賀意富岐美能阿蘇婆志斯志斯能夜美斯志能云と

と有ハ猪之病猪之なり是其猪を射給へる事を阿蘇
婆志斯と詠給へり即狩をも遊びと云證是なり又山
城風土記に玉依比賣於石河川瀬見小川之遊為時と
有ハ女神なれば唯川辺に逍遥する事なども聞ゆれ
ども猶魚釣を云ふる可し取要と云れたるハ然る事ふ
り石の大御歌其雄略天皇五年御紀に出たるが釋に
阿蘇婆斯志を謂射也又遊也と注し万葉十三二十八丁に
三雪零冬朝者刺楊根張梓矣御手二所取賜而所遊と
有も梓弓を射させ給ふ事を所遊と云て即御猟の事
を云るなり古より貴人の成さるる事を遊ばすと云
事常なれども鳥の遊びなど云ハ尊敬の

辞にのてハ叶ハず斯る所ゝ遊ぶと云い○熊野諸手船其事を成させ給ふが遊ぶる謂なり

ハ熊野ハ出雲風土記ゝ意宇郡熊野山郡家正南一十八里有檜樹也所謂熊野大神之社坐と見えて本此地ゝ起れる名ふるが古ハ意宇郡の半より東ゝて今能義郡と云辺へ係て然云りー事傳廿九十百丁熊野之御碕の下ゝ迄せるが如ー(両)諸手船ハ先(垂仁天皇三年御紀ゝ艇と有て)歓明天皇十四年御紀ゝ同船二隻と見えたるを(共ゝ)波斯布祢と訓て皇極天皇元年御紀ゝ仍賜大舶(オホフネ)與同船(ヒトツフネ)三艘と有て同船毋慮紀舟と注たり其大船い和名抄舶唐韻云船傍陌及揚氏漢語抄云都臭能布祢海中大船也と有る都臭ハ都年の轉なる可ー神功皇后元年御紀ゝ忙船を保都年と訓たるゝ船ハ物を積運ぶを以て名と為るゝて倉ハ物を居収むる所なるゝ依て座(クラ)を以て名るゝ等ー若て其同船を毋慮紀舟と訓むい諸来船と云事ゝて小艇ハ繋合(ヒロヒ)て搖行く者なるが故ゝ今も諸國の船人共の云を聞くゝ一艘の船の事を片船と云ひ其繋合の船をば諸船(モロフネ)と云る是なり又波斯布祢と云ハ早く廻りて事を辦ずる由ゝて橋船と云義なるなり和名抄ゝ艇(徒鼎反)唐韻云艇(徒鼎反)上声之重漢語抄云艇(同)小船也釋名云一二人所乘也乎夫祢遊艇波之布祢と見えたるゝ是ゝて此ゝ能野諸手船と云ハ使者を急

ざせ遣ーはるふれば此游艇の事なりと聞えたり
但諸手船と云義は其とは異なる田次は注るが如ー
又波斯布祢と云は走船なれも有べー大舶は帆を任せ
て遣るを小船を搖を搖て走すると者なれば有り俗諸手船とは両人ーて搖を
搖渡る船の謂なりて右の同船を毋屋紀舟と云とは等
ーなるざるなり先諸と云は西手を諸手と云ひ両足
を諸足と云ひ両眉を諸眉と云は更なり斂の両及な
るを諸及と云ひ賀茂祭は葵のなるを片鬘と云る
を桂と合せて繫るを諸鬘と云る類なて毋呂と云は
元来物二有る時は云言なるを其より多き事は毋
呂ニなると云も毋呂は亦有の義なるを重ねる時は亦



有ことなて數知ず物を合する時は云語とは成れ
るなり諸神衆人なども云る是なり然ーて手と云は人
を役(役カ)て使ふ時は云言なて崇神天皇七年御紀は物
部八十年所作祭神之物と有なども物部八十人なる
を祭神の物を作れるが故は八十年とは云るなり今
も物を聞なする人を聞手と云ひ物を見さする人を
見手と云類は人を云なるが聞と云伎有り見ると云
伎有が故は手とは云るなり万葉廿九十丁は佐吉毋
利能保里江已藝豆流伊豆(丁)手(船)夫祢可治等流間奈
久恋波思家と年又四十九丁保利江已奥伊豆手乃船乃可

治都久米於等之婆多知努美乎波也美加毋夫木世三
ヨ五乎船追風早く成ぬゝ一三穂の浦回ヨ寄する白
浪と有るどハ五乎船ヨて五人ヽて撐ぐを云ふる可
し今も船客の船の大小を量ふヨ二挺櫓三挺櫓と云
て其船の大小を云ふ是ある然れバ諸乎船と云ハニ
挺櫓建の游艇を云と知べし古来の識者此事を注す
と雖も或ハ都下の人又ハ山林の客ヨて其事ヨ疎き
が故ヨ其辨悉く得る事能ハざるを予幸ヨ四方海中
ふる淡路國ヨ生れたる故ヨ預て聞保ちて今此説
を得る事實ヨ自然の任なるか如し備伊豫風土記ヨ

（水乎の数を挙て）

（游艇）

（一種ヵ）

野間郡熊野峯所名熊野由者昔時熊野止云船設此至
今石成在因謂熊野本也ヨ見えたる此ヨていい船の製
様ヨ熊野ヨ（一種ヵ）ふるが有ヽ趣ふれども此ヨ謂ゆる熊野
ハ出雲國の地名ふる事右ヨ注るが如し應神天皇ヨ三年御紀ヨ
凡水乎曰鹿子蓋始起乎是時也と有い水乎を舟子と
訓ふるが其ヨ水乎の字を用ふれたるを以て也諸
乎ハ水乎の数ヨ因れる事を知べし和名抄ヨ舟子水
乎附文選江賦云舟子於是搬棹和名布奈古と見えた
り○天鳩船釋ヨ引ふい更ふり良海本金澤本共ヨ鳩
を鴿ヨ作れり本草和名ヨ鳩鴿頸短尻色音古答反鴆頸細班ヽ駁ヽ音夫
有反鷃頭大足赤音古豪反鵖頭長脚短音路頭反鵝頸短色五采可愛反鶏頭大尾長音伏
優反如此之例不女鳩其總名耳出崔寔和名波止と有て二字共ヨ同ト事

あり然るを和名抄に鳩野王按鳩音丘和名夜万ハ止此鳥種類甚多鳩其總名也又鴿本草云鴿古沓反和名以倍ハ止頭短尻色者也と有て種類を分たれども此ハ何れの字なるか拘くず唯波登と訓べき所なるなり偖天鳩船と云て鳩を以て船の名と為るハ波登ハ速飛の義なて其船の行く事の軽く利きを云なり可くや万葉十六二十五丁第二書紀に天鳥船と云て飛ぶが如く速きを云ふと合て

奥鳥鴨云船之還来者也良乃埼守早告許曽又奥鳥鴨云舟者也良乃埼多未豆擬来跡所聞礼許奴可聞と有て鴨を以号けたるを水上を行く事の利き物なるを借て云るなり西蕃に鴨舟と云事有り穆天子傳に天子乘鴨舟浮于大沼と有を郭璞注に舟為鳧形制今吳之舟雀舸此其遺象也と云い荊楚歳時記に五月五日競渡舸舟取其輕利謂之飛鳧と見え張景陽七命に擬人奏弄陵之歌しと曰乘鳧舟兮為水嬉と云事有て彼にも上古に似たり一事の有けり又釋に兼方案之鴿船者速鳥之義速迅之謂也と注せるハ意表に出たる愛たき説なるなり然る時ハ右の鳩ハ借字にて速鳥の語を約めたり一者なりけり其に就て引れたる播磨風土記に明石驛家駒手御井者難波高津宮天皇之御世楠生於井朝日蔭於路島夕日蔭大倭島根仍伐其楠造舟其迅如飛一檝去越七浪仍号速鳥於是朝夕乘此舟為供御食汲此井水一日不堪御供之時故作歌而止唱曰住吉之大倉白而飛者許曽速鳥

云国何速鳥と有り下河邊長流が歌林良材に引るは
ハ天皇御宇明石の驛家に駒牽の御井有り井上に楠
木有り其長百丈切て舟に作りて奉る其舟足の速き
事鳥の飛ぶが如し一旦明石浦より發して半時を以
て住吉の岸に至れり時人速鳥と号く歌に住吉の大
倉向て飛べいころ大倉と云へ伊都岐速鳥と有り本
書にハ右の如く有けるを假字みな直して引れたる者
と見ゆるが文の異同無きも非ずして又続紀に天
平宝字二年三月丁亥船名播磨速鳥並叙従五位下其
冠者各以錦造入唐使所乘者也と見えたる速鳥ハ右

船の名を今変ハ右に引る方漢十一巻の味鑑之
空津平射而水手所之名者諸手師手不相将
有ハ方と有り
如く古より有来
れる事なりけり

の如く其舟足の速き事鳥の飛ぶ如しと云義を取て
古名を襲ハせ給へる者なるべし播磨ハ國名を被用
たるなりて例とハ異なりけるを思ふに仁徳天皇十六
年御紀歌に添筒始駛破利摩波挪摩智と有ハ最潮の
速と続けり者小して播磨を速の義に取れるを以て
其号けられたる意ハ速鳥と同じ意味なるを思ふ可
くなむ有けり然れば此ハ釋紀の説実に面白く思ゆ
何速鳥を一に因名速鳥と有り但右の風土記の奇の終に因
ハ其假字書に伊都岐速鳥と云る一句に依て有つるに然して
伊加尓と訓て一句と成しるるや此等の事ハ
傳二十ハ巻　十　丁浮宝の下に云りきり　○使者
ハ天神の御使を以て直に事代主神に則に遣ハし給

へるりて大己貴神の女なも私の御心擬御在し坐さる由を明らに聞えさせ給へる所多り然れば此の使者も第一の一書は使人と有るも共は御使とこそ訓べき所よい在けれ○稲背脛ハ古事記よい天鳥船神と有り即此は謂ゆる大背飯三熊之大人神賀詞は謂ゆる天夷鳥命は坐す事上百十一丁四百九十丁は注せるが如し即古事記の上文は尓天鳥船神副建御雷神而遣と見えたりを記傳十四七丁は鳥船ハ船鳥を下上は誤れるまて即夷鳥と同言なる可し」と云れたるハ然る説なる如くなるなり此は謂ふ天鳥船神ハ右の天鳩船は乘

（私記は伊奈世波岐と有り）

て到らせ給ひ呼まてハ專大己貴神の御言を持行て事代主神の諸否を問給へり御事業を以て天鳥船を以て御名は負ー諸否を以て御名は負ー給へるなれハ天夷鳥命と申すと天鳥船神と申すとい其義大は別なりけり者なりけり其稲背の意ハ右五百五十丁（）五十田狭之小汀又五百二十一丁當須避不の所は已は注せるを脛ハ和名抄は脛說文云胻故即反和名（）波岐脛也纒云脛胡定反整也言似物莖也と有て人体を幹木は比へたるは對へて端木と云義なり通證は景行天皇四十年御紀有七掬脛孝德天皇

御紀有八掬脛越後風土記有人

名八掬脛其脛長八掬多力大強と見えたり此も其と
同じく脛を以て御名に負せる故に可きか然れども
諾否の事の是非を質す謂なり其ま脛と読むむ事
八如何なり故試に思ふに（脛）波岐八借字にて波伎と清
て訓べきなり允恭天皇廿三年御紀歌に斯哆媚鳥和
之勢と有を釋に下樋也趍走也と注し雄略天皇六年
御紀大御歌に和斯里底能と有を釋に趍出也と注せ
り是波と和と通ふにて波伎八別の義なるむ此八
天神の御使にして経津主神武甕槌神二神と共に天
降り御在し坐て大巳貴神の諾否を別て共に計ら

ひ給ひ又大巳貴神の使を兼て事代主神の許に物為
給ひて亦其諾否を別給へる功を称へたる御名なり
可くず所思えたる此謂なり依りと見えて神名式
に出雲國出雲郡杵築大社名神大同社大穴持御子神社
同社大穴持伊那那西波伎神社と有て事代主神と並び
せ給ひて大社の従神にて渡らせ給へる御事八更に
り同郡阿須伎神社同社神阿麻能比奈等理神社と有
て味耜高彦根神と並びせ御在し坐る此御事共を合
せても其異名同神にて渡らせ給ふ事更に疑を容べ
き隈さへず無りけり右五百五十字に注に如く同郡因佐

神社ハ今經津主神武甕槌神ヨ坐す申あるが其地名
とさへも成ぬるを思へば本より此神も御在し坐る
なこりの又右ヨ云る和名抄遠江國郡名引佐伊奈佐と有
も此ヨ由有べくや古事記ヨ建比良鳥命此遠江國造等
之祖也と有ヨ思合す可し三代實錄ヨ仁和元年二月
十日丙申授肥前國正五位稲佐雄神從五位上と有ら
此國字の下ヨ從五位下の字を脫せるか此神名稲背
脛命ヨ近く聞ゆるかり若くハ亦名ふるヤ猶考ふ
脛の下ヨ神と也命と也無きハ大巳貴神の意可き事ふかし備此の稲背
を以て名ふ可けれども甚良ハしかず口訣ヨ稲背
脛者大巳貴神之從神と有ふども深く考へざる説ふ
り若て右ヨ引ら神名式ヨ大穴持伊那西波神社と

と有て大穴持と冠らせたるハ其神の御使として事
代主神の許ヨ御在し坐て諸否を別給へるが上ヨ後
ヨ其神の祭祀を主るとも給へるふどヨ依れり也 ○謂使者曰ハ事代主神ヨ
猶諸本共ヨ脫せるを幸ヨして良海本ヨ有ヨ依て今
補ひつ○事代主神口訣本ヨハ事代主之神と有り良
海本ヨハ事代主神之許ふ云と有ヨ依て之許ふ云り
四字を補ひつ然るハ事代主神遊鳥釣魚の事ヨ遊行
て三穗之碕ヨ假初ヨ御在し坐るヨハ有れども其所
を行在所ヨ為て其地ヨ住せ給へる趣ふれば好り若
て其神の本所風土記ヨ依て求るヨ得ず御父大神と
共ヨ御在し坐る狀と所見ざれば右の阿須伎神社

の地ゞ本よりの其神の住處ゆゑ可一許ハ毋
登と訓て上章第三ノ一書ゝ共在素戔嗚尊許とも今在
吉備神部許也とも有ゝ等しくて上二百十ゝ注せり
ゞ如く身の所在を云称ゆゑけれバ此ゆゑ之許とハ
云べし尓云ハ然云而と訓て次ハ且問將報之辭と云
への移り甚宜しかりけれバゆゑ然れバ此ゆゑ尓云と
尓と置て志加伊布と訓ゆゑハ別ゆゑて有ハ常ゆゑ語ゆゑ云
此ハ語中ゆゑ左と次へ事を移ゆゑ云り ○致ハ伊多
須と訓て上ゆゑ致矢と有ゆゑ致と一事ゆゑ良海本ゆゑハ
到字を作り備此ゆゑ致高皇産靈尊勅於事代主神と
有ゆゑ勅ハ先ゆゑ二神の問大巳貴神曰高皇産靈尊欲降



皇孫君臨此地故先遣我二神駈除平定汝意何如當須
避不と見え古事記ゆゑ問其大國主神言天照大御神
高木神之命以問使之汝之宇志波祁流葦原中國者我
所子之所知國言依賜故汝心奈何と有ゆゑ天神の詔命
を其御使ゆゑ稲背脛命を以て事代主神の御許ゆゑ在
の任ゆゑ仰遣ハすゆゑ事を致とハ書されたるゆゑ良海
本ゆゑ尓云と有ハ其天神より仰下されたる任ゆゑ述る
由ゆゑを合せ考ふ可一古事記ゆゑハ故尓遣天鳥船神
徵來ハ重事代主神而問賜之と有て天鳥船神を遣ハ
して其父大神の御許ゆゑて二神より問せ給ふ状ゆゑ

ども其よりて稲背脛命の御功更に由無れば此い稲
背脛命に其御言を令持て被遣たる趣なるなむ甚良
ハーくず所思えたり○且問將報之辭ハ右に云る如
く天神の御使稲背脛命を以て大巳貴神の使者と一
て遣一給ひ其御答申させ給ひむ様を令問給へるふ
り已に注る状にて大巳貴神ハ一も天下の大国主
神にて渡らせ御在一坐て仍ての大御政ハ一も專事
代主神ず萬の事務を執持一御在一坐けるず故に其
事代主神の辭を以て復奏一奉らせ給ハむとある事
右五百二十二下 に古事記の傳者不得白我子八重言代主神



是可白と有る大巳貴神の御言を注一て云る事共を
合せ読て曉る可き者なりー 大巳貴神に於て巳に避奉らせ給ふ可き
御心にて御在一坐ず故に巳命より復奏させ給ひも
後に御子神等に仰入させ給ひてハ始終の御為に至
一ろろ[illegible]き事を思忘れ[illegible]て父神も父神ある子
神も子神ある云知ず外ろ味りひ有る所ろる者ず
○事代主神謂使者曰ハ其稲背脛命に語らせ給へる
ろり此所の御言に我父宜奉避吾亦不可違と申さ
せ給へる由見え古事記にハ其御父神の時に徴来給
へる趣なるハ別ある傳にて有れども 語父大神曰言
恐之此國者立奉天神之御子と有ハ天神の御使を御
父神の使者と一て遣ハされたるず故に其報告をば

直ち天神ちハ申さず父大神ち聞えて其ち天神ち
白上させ奉給ニて右ち且問ニ將報之辭と云ちハ此
ち在ち事ち〇今天神有此借問之勅の借問ハ私記
ち止此太麻布と有り勅字ハ右ち高皇産尊勅と有
も共ち御言宣(ミコトノリ)と訓む例のち此借問ハ即右五百十
ち注せち神問ハ是ち古事記高津宮歌ち宇信志(けれハ迦宇枳波斯と訓べきなれども思へとも)
許曾斗比多麻閑(ハ閑)許曾斗比多麻閑と云例も有しハ私
記の訓ちて在ぬ可し(借問の字ハ通證ち文選遊仙詩
ちも在し借問此何誰と有ち是ち唐詩
うと思ひ〇吾父宜當奉避ハ私記ち四字引合せて左
利太万不陪久也と有ハ又父大神ち避給ニ可しや否



〇示ふぎれハ無礼きはみなりを以て示り

と又問返し奉らせ給ふ義ち成も此の文意ち叶ハず
又官本ちハ避給布倍志と訓たれども其ち正ていハ御父
へ指揮(ヲシヘ)給ふ事と成りて此の狀ち叶へらず唯金澤本
ち避給布倍久波と訓たち其ち正ていハ吾父の避給ニ可
くハ吾亦云ふと其成し給ふ狀ち隨ひて共ちち然任
奉ち義と成れらハ今ハ其ち從ひ訓ハ(奉学を立て)古事記ちハ語
言
其父大神宮恐之此國者立奉天神之御子云と見え
て甚愛たし恐之ハ上四百七十丁ち注るが如く仰事を承
ハり諾ふふ言と成て今俗ち事ち伏て畏まること云ち
義なり天神之御子ハ天皇尊の御事ち正て即現事顕

事を避奉らせ御在し坐て神事幽事を治させ給ふ可
き由を薦め聞えさせ給へる事此なて直に隠れさせ
給へる御行の御在し坐けるまて著明くあむ有けり
即此の上に二神の天神の御言を傳へて當須避不と
宣へるを事代主神は移し聞え給へる所あるを考合
す可くあひ第二一書に曰天神所求何奉歟と有し古
事記と同意なる可し但所求と有は如何
なるや聞ゆ〇吾亦不可違は私記に多比万津良之と有
は當れる訓なり古事記の建御名方神より畏まりの
言を述給へるは亦不違我父國主神之命不違八重事
代主神之言此葦原中國者隨天神御子之命献と有

隨と云事の反なり其下に大國主神の天神に畏まり
を白させ給へるは僕子等二神隨白僕之不違此葦
原中國者隨命既献也（中略）亦僕子等百八十神者即八重
事代主神為神之御尾前而仕奉者違神者非也と有し
右に同じく其明宮段に故大雀命者勿違天皇之命也
と有ども隨字を加へて見る時は甚能通ゆるなり
其水垣宮段歌に斯理都斗用伊由岐多賀比と有り多賀比は主憂と云事にて俗
に手の裏を返すと云に當る言なり万葉二十左下に天
地典共將終登念乍奉仕之情違奴十四五下に伊麻思平

多能美波播尓多我比奴ニ云於夜尓多我比奴又二十四丁
四比乃故夜提能安比波多家波自十九三十四丁ヨ攜手共
將有等念之尓情違奴大和物語ヨ斯ヲ御歩行ー給ふ
甚悪キ事ヲリ事ヲリとて内より少將中將ヲど此彼待ラ
へとて奉給ひけれど違ひつゝ歩行給ふ源氏橋姫三十
七丁ヨ一言ヽ如此打出聞えさせてむ状を違へ侍ラま
しくヲむど多き語ヲリ宇治拾遺五ヨ然りとて兄
云ヽ又故殿の御在ー坐ーヲ違ハせ御在ー坐ぬが哀
れヨ思えて云ヽとも見ゆ大凡物ヨ佐加布と云言有
ヨ近ヲり○海中ハ和多那加と訓べし海宮遊行章第六ノ一
書ヨ第已失鈎於海中又ハ乃作魚目堅間小船載火ヽ

出見導推放海中又第八ノ一書ヨ海中自有可怜小汀神
武天皇戊午年御紀ヨ海中卒遇暴風欽明天皇十四年
御紀ヨ河内國言泉郡茅渟海中有梵音万葉一二十六丁ヨ
在根良對馬乃渡渡中尓幣取向而早還計年と有ヲど
是ヲリ古事記の趣ヨてい其神を徴来ての事ヲれど
と此ハ即三穂之碕の海中ヲリヲリ○八重蒼柴離柴此
云府至古事記ヨハ唯ヨ青柴垣と有て其ヨも訓柴云布
斯と有り私記ふ也倍阿乎布之加岐と有て諸本共ヨ
然ヲリけれい八重垣八重雲ふどの例ヨて八重之と
ハ云ざりけりヨこゝろ備柴を府至と云ハ記傳十四十七

丁ゝ音栄垣ハ青葉の栄の垣を云ふ布斯ハ字の如く
栄の事なり中昔の歌ゝハ布斯志婆と重ねても云り
栄を水中ゝ漬し置て魚を捕るを布斯都氣と云し是
なり拾遺集冬平兼盛歌ゝ栄漬し淀の渡を今朝見れ
ハ解むとも無く氷りけり」と云れたるが如し猶千
載集冬ゝ堀河院の御時百首の歌奉りける時初冬の
心を詠侍けり藤原仲實朝臣泉川水の水面の栄漬ゝ
岩間の氷り冬ゝハ来ゝけり和名抄漁釣具ゝ罧尓雅云
罧蘇蓋反字亦作梭謂之浮字廉反又音浮和名布之都久郭璞曰積栄於水中
魚得寒入其裏因以簿圍捕取之ゝ有り是ゝて栄を府





△摂磨風土記稱保部伊乃島伴ゝ品天皇天射日人天射磨射目前狩之ゝと有り射目人ハ右ゝ同ゝ射目前の地名ハ其目栄ゝ依て起ハるなり

至ゝ云證是なり又今一ゝハ目栄ゝ云物有り万葉ゝ
謂ゆる射目ゝ云物是なり其六十四ゝ野上者跡見居
置而御山者射目立渡八三十七丁ゝ射目立而跡見乃岳遊
之九十一ゝ射目人乃伏見何田丹尓十三十六丁ゝ高山
峯之手折丹射目立十六待如ゝ有を或説ゝ此射目ハ
今の目栄ゝ云物ゝて鳥獣を伺ひ見る為ゝハ栄など
折圍ゝて身を翳すやうゝ為なる者なり」と云るハ然
なる説ゝて△和名抄射藝具ゝ射翳文選射雉賦注云翳於計
反隠也障也師説末布之所以隠射者也と云るハ是なり千載恋四仲
實目栄刺す賤男の身ゝも堪不得て鳴吹く秋の声立

つゝ有り」堀河院太郎百首に俊頼障子の繪に目榮と云
事を刺て鹿笛吹く所目榮刺狩夫の笛の声ゞとも知
らでや鹿の鳴交すらむ」と有ふど目榮の字の如く榮
を刺立ては其透間より見る意なるべし是も亦榮を
府堂と云ふ一證なり備ふ可きなり然れば右の万葉
射翳刺而は其蔭より鳥を伺ふと云義を以て鳥見
と続けたるなり冠辞考に射財部と続けたるは非ず又
其射目人乃伏見と有は同考に鳥獸を射る時は目伏
を刺て伏隠れ居て狙ひ射る故に伏見と続けしふ
りと云れたる此説實に云れたり備八重蒼榮籬は榮垣を八重に圍ま
たるまして第二の書に謂ゆる天津神籬の類にて今迄
八顕身にて御在ー坐ーを今は神と成ぶせ御在ー坐

て其神籬の中に隠れさせ御在ー坐す由を示し聞え
させ給へるなりけり又記傳に麁栗宮段歌に淤美能
古能夜幣能斯婆加岐又意富岐美能美古能志婆加岐
と有と此布斯垣と同物ぶりと云れき武烈天皇前
御紀にも於弥能姑能耶賦能之麁柯枳と有を釋に謂
八重也私記曰師説耶賦謂八科ぶ榮垣乎結曽と有り
備垣は榮を以て圍ふが上代よりの製と見えて和名
抄墻壁類に籬柳字附釋名云籬音離字亦作篱和名末加岐一云末世以榮
作之言疎離也説文云柊ヒ見反和名加久布以榮麁之と有に合
せて常神天皇の皇都を磯城瑞籬宮と申せるに万葉

十三丁に據垣と書るは就て冠辭考に美豆と云語は先は草木の若く美しく榮ゆるを云より萬の物を讃稱へて美豆云々といふ云けり同巻に槻木は水枝指と詠こせるも若木を美豆木若枝を美豆枝若く健よりある人を美豆にと斯ゐと云を思へ此は依て崇神天皇の御時は未万の事假初の如くありければ美豆々々しき若木などしてを籬為させ給ふ事の有つるむを美称へて宮号とい為されしあり可し」と有り又反正天皇の宮を柴籬宮と申せるを古事記には柴垣宮と作るを記傳三十八に斯婆加岐と訓べし神名帳は伊勢國鈴鹿郡志婆加支神社と云し見ゆ崇峻天皇の宮をも倉椅柴垣宮と云ひ欽明天皇三十一年御記は幸泊瀬柴籬宮と有り」と注されし斎宮のい柴垣とは常なる云事なり又大嘗宮は八重垣と云有り儀式は拵柴為垣押收八重垣末榊榁枝者古語所謂志比乃和恵と見え式は將柴為垣押榊八重垣末柱將榊枝古語所謂志比乃和恵と有り此等なて上古の八重垣の狀を知べし偖垣は右の如く其屋を圍ふ科なるは就て釋は蒼柴籬者只海中之屋也と云るは意表の説なるが故は心も留めざりつるを此第六に書は其於秀廷

浪穂之上起八尋殿而云こと云事も有ければ此も其
如き状なて八重蒼柴籬を栫て其中ニハ神籬を建さ
せ御在ー坐て鎮り坐ますを云ふなりけり記傳十一六十
日本書紀ニハ事代主神の御事を姓氏録ニハ積羽八重事代主
命と有り神名帳ニハ都波八重と有り其都美婆八重
とハ彼青柴の葉を弥重ニ積隔てゝ垣と成し給ふを
云ふ要と云れたる実ニ如此有べき説なりけり延喜
六年竟宴得事代主神藤原朝臣佐高豆御孫尔八洲平
（日本紀）（須安美万尔也志末）
佐利豆奈美能宇倍乃阿遠布事加幾迦多比為須留可那
避豆波上乃蒼柴垣尔旅乃頒流哉と見えたりと此の
八重蒼柴籬の事を詠れたるなり白井宗因説に謂之
蒼柴者忽開勅令退

隱故不待其枯也と云ふハ闇雷の理屈なれ古義を知
ざる者なりと口訣なり因於海中者避土地也なりと
云ふと然なれ此の事の状を明めざるを出たり○造ハ古事記に弥蹈頭其船
而天逆手矣於青柴垣打成而隱也と有る打成の語に
當りて此次に蹈船枻と見えたりと其船枻を蹈頭させ
御在ー坐て天逆手を拍せ給へハ忽に八重蒼柴籬と
変化なるが即其神の造給へる意を以云なり記傳十四
十七に打成の打ハ天逆手を拍ふり成ハ蹈頭けなり
船を青柴垣に変化なり船を頭けたるむ状ハ本より
垣に似て曲有なり上に於湯津爪櫛取成其童女又此
次に取成立氷取成劔刃と有も同ト格なり」と云れた

（谷重遠ハ蓋海島作草舎也と海島ふりとハ然る事の出来たる者と思へるも意ハ
り又釈日本紀ハ八重例文神道之愛敬と云ひ又）

（和記すれ不奈乃倍と有り）

ろまて心得べし○船枻此云浮那能倍と云い船舳（フナヘ）と
同じくうげ世る船棚（フナダナ）と云ひ船端（フナバタ）と云ふ是なり△万葉
廿七二十丁に伊麻許曽麻布奈太那字知底安倍底許藝
泥米と詠ふ和名抄船具に枻野主按枻音世字亦作栧
大船旁板也と有り是なり其船棚無きを棚無小舟と
云ふ方葉一二十五丁に安礼乃崎擕多味行之棚無小舟三
十九丁小笠縫之島擕隠棚無小舟三十五丁海赤通女棚
無小舟擕出良之古今大歌所歌に四極山打出て見れ
ハ笠結の島擕隠る棚無小舟ふと有を袖中抄小俗に
漢（タイ）枻（ヘイ）として舟の左右に緣（ヘリ）やうに板を打附たるふ

（櫓の方に著かるをば志太那と云ふ屁の棚なり）

り其を蹈歩行（アリ）きて櫓棹を使ひ活くなり小き舟ハ小
此舟棚無きなり上と云るが如し又漁父辭に鼓枻而去
と有るハ船端と訓り夫木八四十八丁鶏河枻に棹打鳴し
爾火の如何ある淵を行敢るらむ九二十四丁菱枻を叩く
も寂し霄の間に菱取る舟や江に敢るらむ世三四十六丁
に浮寂（寂）して枕と頼む枻に置並べたる梶も有けり上ふ
で此ハ船棚を船端とも云ふて即船邊なる者なり
口訳に枻梶也邊之言と注せる梶せと云注當るざる
可し玉篇に枻桂大船旁板也と云ひ又拖字
をも布那婆多と訓るを淮南に考べし○蹈ハ古事記に八蹈
注に船弦板也と有をも考べし
頭其船と有り此ハ右に造八重蒼柴籬と先云て此に

蹈船枻而避と有りて天逆手を打給ふと云事も無れ
ハ彼記に合せてハ注ー難き所の状ありと雖も此も
蹈船枻て天逆手を拍せ給へハ忽ち八重蒼柴籬と変
化る其中ハ隠給ふと見る可きなり仁徳天皇前御紀
に蹈船而頭古事記に倉頭其船墮入水中と有るとも
ハ甚く趣の別ありけり事ありと纂疏ふとに言蹈翻
船板而入海島也と注させ給へるハ殊に天逆手の妙
用を知らせ給ハざる説なりー大海の荒浪の上に
神籬を樹(タテ)て御在ー坐すふと云事を疑ふハ顕身の
人の上なるに有ける右五百八十ハも注せるが如く経津

主神武甕槌神の天降り坐て大巳貴神に神問ーの所
を古事記ハ拔十掬劔逆刺五千浪穂跌坐其劔前と
も有て神等の御上に奇(メツラ)しと為ざる事なり(明)
淳和天皇天長七年御紀伊豆國造作島神の神験を顕
ハーー給ふ所に履潮如地入地如水と有を以ても何の
疑ハーき事なハ有べき是こそ鈴屋大人の常に云教
清く離れて見奉り向知る可き御事なりけれ如く生賢ーき漢意を
ー即上ふ二神の御言に傳給へる天神の汝意如何(如)當須避不と有る
其勅を事代主神の御許に致させ給へりー御答に我
父宜當奉避吾亦不違(可)と申給ひて隠らせ給ふ所なる

が故に其事共を結ひて避之とハ書されたるなり古事記ニハ此所に當りて隱也と有り記傳十四十九に隱也ハ青柴垣の内に隱坐と云ふり近飛鳥宮段大御歌に美夜麻賀久理兵美延受加母阿良年推古天皇二十年御紀歌に夜須弥志斯和餓於明者弥能詞句理摩須阿摩能揶蘓訶礙ゑんど有り略と云しき備右の如く八重蒼柴籬を神籬の事と知り其神の御座と見る時ハ其中に住せ給ふ事を隱坐と云ふり右の歌ゑんも天之ハ十蔭と云ハ御殿の事にて其中に住せ御在ー坐を隱坐とハ云ふるゑんり祈年山口神詞に瑞能御舍仕奉兵天御蔭日御蔭登隱坐兵大祝詞に美頭乃御舍仕奉兵天之御蔭日之御蔭止隱坐兵ゑんど有ふ此等の例ゑんり可くや此より後に大國主神の亦僕子等百八十神者即八重事代主神為神之御尾前而仕奉者違神者非也と白させ給へる事古事記に見え第二の一書に是時歸順之首渠者大物主神及事代主神乃合八十萬神於天高市師以昇天陳其誠款之至と有ハ右の若ゑんりまてし事代主神の此を限と為て水中に沒しさせ給へる者と思ふ說共の僻事ゑんる由を知べき者ゑんり記傳に此ハ青柴垣に隱給ふと云ふゑんり此次に父大神も八十坰手に隱りて侍ハむと有ふ如く此神も同

しく海底に入坐て顕御身は永く隠化給ふ事を含め
たりと云こと云れしは然る説なれども海底に入坐と云
は非なる由を右の辨へ云るが加し○古事記に謂ゆる天之逆手とは此
國土を天神の御命の任に避奉ふせ給ふ歓喜の御心
を表はし奉ふ也給ふ御所態なりけり古事記朝倉宮
段一言主神に物を献ふせ給ふ所に尓其一言主大神
手打受其捧物と有は物を得させ給ひて悦ばせ給へ
る御態なるは更なり顕宗天皇御紀皇壽御詞に縮見
屯倉首縱賞新室略夜深酒酣次第儛詎略天皇次起為
室寿曰略手掌擦亮()拍上賜吾常世等と有を釋に拍
上賜者飲酒之義也と注して御紀に宴又讌字を宇多

豆と訓るも是なり手を拍て歓び楽しふに出たり右
等の事共を書して記傳に四十二十二に持統天皇四
年御紀に皇后即天皇位公卿百寮羅列西廂而拍手焉
称徳天皇御紀に大嘗會是日猶侶進退無復法門之趣
拍手歓喜一同俗人三代実録卅八に大極殿成右大臣
設宴於朝堂院含章堂賀落也略飛彈工等二十許人不
任感悦起座拍手歌儛合座大為咲楽土佐日記歌に追
風の吹ぬる時は行舟に帆手拍てこそ嬉しかりけれ
と有は悦びて手拍つ事を舩の帆手に云係なり此等
皆楽しく悦ぶ意より拍なり略要と有が如し大嘗祭

儀は國栖奏古風五成悠紀國奏國風四成次語部奏古
詞次隼人司奉隼人俳奏風俗歌儛皇太子以下五位以
上就庭中敞跪拍手四度皇太子先拍手而退次五位
以上拍手六位以下亦如是其小齋人不在拍限訖退出と見えたるを
式には唯は拍手とのみ有れども跪拍手
拍手四度度別八遍神語所謂八開手是也拍手畢小拜と有れば後進
行るゝ儀式あり由中臣寿詞講義第三十五條に注るを如
し此は神事なるが故に古礼を用ひて八開手を形の
如く拍つ事なれば在れども右に引る続紀の如くに謂
ゆる拍手歓喜と有る是なり又大神宮式に三節祭の

式を祝戴たるに斎内親王并衆官以下再拜拍手八開手
次拍短手再拜如此両遍と有る儀式帳の趣も此に同
じき由祝詞講義十三に已に注り右の持統天皇
御紀の如くは即位に更なり朝賀以下年中の諸公事
に就て臣以下百官の人々手を拍つ事ありけむと思
ゆるは桓武天皇御紀に延暦十八年春正月丙午朔皇
帝御大極殿受朝文武官九品以上蕃客等各陪位(有)再
拜為再拜不拍手以渤海国使也と有り此にて拜は四
度(拜)にして手は八開手なりし事知られたり然るに斯
る蕃客の有り為に我が古礼を除て西蕃の拜法を用

させ給へるこゝろ當世の人情とハ云あゝ甚有まゝ
うりけゝ御政なハ御在し坐けれ抑天皇と申奉るハ
天神御子ゝ御在し坐て万國を照臨ましく給ふ天津日
継ゝて渡ゝせ御在し坐せば万國に渡りて我が正朔
を奉りゝしめ我が礼典を従しめ給ふ可き御事なり
ければ斯る時なるこゝろ古実を考へ古式を正して行し
め給ふ可き御事なりを甚浅ましきなども云ふハ更
なり西蕃なれ我が拍手の拜法を聞て古之遺法とさ
へ記せりけゝ者ふるゝ和其頃より癈れたりけゝ
まや儀式以下の御書共なも朝礼なハ凡て其事亡ふ

りて唯神事なのみ其形の傳ハれるこゝろ切なの賜物
なハ在けれ国礼春官大祝辨ハ拜注振動戦栗変動之
相撃而拜今倭人拜亦如此古之遺法也と云ひ魏志東
夷傳ハ倭人見大人所敬但搏手以當跪拜と書し又傳
辭說事或蹲或跪稱手擄地為之恭敬對應声曰噫此如
然諾と云ふ蹲ハ蹲跪なり跪ハ跪坐なり両手擄地と
ハ席ゝ手を突くなり て今の礼式ゝ異なる事無し
此ハ王仁ふとの博士を彼より召給ふ上れる
世の風俗と云中なも健ゝ筑紫なるとの状を見て記せ
るなるゝむゝ我が礼法の彼を師と為ざる證是なり
天之逆手と云ふ天ハ上代の礼法凡て天上儀を擬行
いせ給へるゝ故なり右ゝ産せるハ進む時ゝ手を拍
て歡び樂しゝ向ふなり逆手ハ借字なて退手なり退
くゝも歡ひ樂しひて罷れるなり或說ゝ鎮魂祭式ゝ

喫宮内者、令賜酒食行酒三杯以後拍後手退出と有り
後手是ありと云ふ、然るに説は（記傳十七に引れたり）白主太神宮儀式帳六
月と次祭條は祭畢て人に直會殿の座に就き大直會
を給はり畢る時は後手一段拍と見え建宮行事記同
祭條齋内親王御拜の時一禊豆の詞は御拜四度御後
手又御拜四度御後手と有るとか何れも退出の時の
事なりければ共は後手を退手と訓べきなり俗此は
事代主神の御言は我父宜當奉避吾亦不可違と申給
へるを第一の書は天神所求何不奉敷と見え古事記
は諸其父大神言恐之此國者立奉天神之御子と申

させ給ふと有るは此時の御應答は少し障る所御在
し生ず御心の底際諾ひ奉らせ給ふ由を見え奉らせ
給はむと歡び樂しませ給ひしかも此は天之逆手は
拍成し給へるなりけり今も賣買の事畢りぬれば互
に手を拍て共に相背くぬ証と為るも古の遺法なる
事云も更なり然るに中昔よりは物を咒る事にも用
ひしは（天之逆手と云有り）伊勢物語（九十六段）に彼男は天之逆手を拍てふ
む咒ひ居るなる貪つけき事人の咒事は負ふ物はや
在む負ぬ物は在む今こそ見めとぞ云ふと有は
（大之）逆手は（後手なり）事の終を為る事なり故は其を人の終る

内閣文庫

※拾遺愚草ニ怨恋ものゝ天の逆手を打てハ降雨ハ木葉跡たるゝ無しと有も此逆手を拍て呪ふ時ハ木葉をさへふ散をと計の驚ハ有るまじきなり

※然れば右の伊勢物語四下のハ海之逆手なれば左ハ一ツて非ゆけり

意を取成して行ふ事ハ一ツ（ふるまひ別なるのみ）出たる可し六百番歌合寄海士恋我恋ハ天之逆手を打返と思ひ解てやせとも恨ゝむ又新勅撰ニ如何ニ為む天之逆手を打返し恨ゝても猶恨有る世をと有を八雲御抄ニ嫉き事を呪詛するを云なり（只深き恨を云なり）と注させ給へり偖此の逆手ハ右の如く後手にて退出の時ニ拍つ事にて常の拍揉ニ異りハ無きを呪詛ニハ其名を假れるのゝ（にて此事代主神のとハ異なる）ふ拍を云なる可し今も拍手ニ忌のゝ

内閣文庫

にて賢ニ逆手ニ拍を云なる可し今も拍手ニ忌のゝ（事代主神の御事ふハ叶ずム）ふ拍て手にて物為るニ逆手を嫌ふ事ハ其呪詛の様ニ似るを以て慎しむ事なる有り克ゝ右の差別

国立公文書館
National Archives of Japan